
とあるチートを持って！

百合姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるチートを持つて！

【Zコード】

Z1936Z

【作者名】

百合姫

【あらすじ】

この物語は一次に良く見られる噛ませ犬として出される性格の悪いオーリーが主人公であり、そんな主人公が改心したけれど前の評判が評判なだけに肩身の狭い思いをしたり、勘違いされたりの物語です。

チート成分は低め。

いまいちイメージがわかないって人はとりあえず読んで見ると良いと思うよー。

作者が現実逃避としてバカな作品を書きたいと思ったがゆえの投稿です。ゆえにギャグテイスト。シリアルスは・・・ないと思われ。そして更新速度に過度な期待はしないでください。
なおかつジュエルシード事件のみで完結するかもしません。

ふるわーぐ（前書き）

始めに言つておきます。

感想などではオブラーートに包んでね。

作者は非常に打たれ弱いのです。

ふるわーぐは三ページ分くらい。

噛ませ犬的勘違い系主人公のアホな呪いをお楽しみください。
まあそんなに量があるわけでもないんですけども。

プロローグが終わると勘違いから改心します。

それとおそれく下ネタはあまり無いと思います。今回がピーコックつて
くらいかも。

今のところヒロインはいつそのヒトフヒトの母のプレシアにして
しまおうかとも思つていたりして。

レベル高すぎるかな？

そしてご都合主義は出来るだけ省きたいとは思つてます。期待はし
ないで欲しいですが。

ふわふわーぐ

おっぱい。

ある人は言った。

それは神秘のベールに包まれた神々の宝玉だと。

ある人は言った。

そこに全てを置いてきた。探し出せ、その秘宝を、と。

ある人は言った。
女体最高！！と。

ある人は言った。

胸とは。胸ではなくおっぱいである、と。

ある人は言った。

おっぱいを求めずして何を求める？

富か？名譽か？

否！

男として生まれたからには至高のおっぱいを求めずして何とする。

ある人は言った。

おっぱいに何が詰まってるかだつて？

H A H A H A H A ! 何を今更なことを。

・・・ふつ。

浪漫が詰まってるのや。

ある人は言った。

いや、胸に詰まってるのは脂肪だろ？』

ある人は言った。

そういう夢の無い奴は腸をぶちまけて死ね、と。

ある人は言った。

人体の神秘。言い換えるならそれだね。と。

ある人は言った。

あの曲線美。柔らかさ。重量感。すべてにおいてマーベラス、と。

ある人は言った。

芸術はおっぱいだ！と。

ある人は言った。

小さなおっぱいも大きなおっぱいも等しく胸おっぱい。全てのおっぱいを私は愛そう、と。

『本当にそれで良いの？』

「ええ、もちろん。」

『男神じゃない女神の私には分からぬいけど……そんなの良いの？』

「はい。」

『・・・ま、まあ頑張ってね？』

『ありがとうござります。俺、良い嫁さんを探します。』

『別にそんな決意を私に聞かされてもドウ答えれば良いか……』

『暗に貴方には嫁になつてくれないかな？と。』

『H A H A H A、無理。貴方みたいな変態、好みじゃないから。』

『し、失敬なつ！』

揉むにしても決して無理やりには・・・』

『・・・はあ。とつとと行つて頂戴。気持ち悪いもの。貴方。』

『ふふふふ。これで俺のオリ主ハーレムが・・・ぐふふふふ。』

『本当に気持ち悪い。・・・じゃあね。』

「はい、本当にありがとうございました。』

こうして1人の男。

オリ主でイケメンな彼が異世界でハーレムを作るべく頑張つてみる物語が始まる。

はつきり言おう。

彼のその夢はかなわないだろう。

なぜならば。

『・・・勘違い系オリ主ってところかしら。

あんなの好きになる子が居たら・・・不憫すぎるわ。』

この物語は勘違い系の彼が主人公の物語である。

最近の二次創作には転生オリ主の他にままオリジナル主人公が出てくるが、その中でもヒロインに纏わり付く嫌われ者の勘違い系の噛ませ犬オリ主。

この物語は、その噛ませ犬側の彼から見た物語である。

果たして彼はまともな主人公となりえることが出来るのか?
気味悪がられずにヒロインに近づくことが出来るのか?

さてはて皆様。

「魔法少女リリカル なのは」の世界によつこそ。

とある時刻、とある家庭にて。

ハイハイをする子供が居た。

もとい物語の主人公、相馬そらま響ひびきである。

見た目は銀髪にオッドアイ。

彼の前世の生涯が閉じたのは中学2年。

まさしく厨二病に疾患してピークに当たる時期である。

そんな頃合に死んでしまった彼がそんな見た目になるのは当然のことで、厨二病を脱する頃合。もとい7歳になる頃にはきっと自分の姿に悶絶するだろ?「なぜあの時に、こんな奇抜な見た目を選択してしまったのだ!...」と。

多分。きっと。おそらく。
してくれると良いな。

現在の彼は早速発情していた。

「・・・ふふふふ。俺の母親がよもやこんなに美人だとは・・・近親相げふんせふんも、悪くは無い。

何、俺のイケメンを持つてすれば・・・」

ドンビキである。

生まれて数年で母親とのチヨメチヨメを考える人間。

あまりの非常識ぶりに本当に貴様、日本人か?と問いたくもなるのだが、自然界では親と子の交配は至極当然のようであるし、血統的にも問題は無い。

別に良いのでは?という気もしてきたのは、あまりの思考回路ゆえに彼を人間としてではなくその辺の獣と同列視してしまっていると

「ううことなのだろう。一 念反省しておう。」

あれでも彼は人間なのだ。

それはさておき。

「あらへおっぱいが欲しいのかしらへ。」

母親である相馬 文香ふみかに遠慮なくむしゃぶりつけていたを見て戦慄しつつも思うのは、田たが血走りすぎで怖いと言つてゐる。目が血走りながら乳房をしじきつ吸い付く赤子。下手なホラーよりも怖い。

「・・・・・つかつかのひーーー。」

と吼えながらも母親の乳房にがつつく響。

全国の赤子や君のよくな子供を産んでしまつた文香に謝つてあげたいほどにその姿は醜かつたと言つておく。

これを見ても自然な笑みを絶やさないとは母親は偉大である。否、文香が偉大なのだろう。絶対。確實に。それしかない。きつとそう思つ。

そもそも彼の毛の色や田の色的にこれを我が子として愛せる彼女はまさに聖母と言えよう。

「・・・・・つかん、もはや眠くなつてきた。」

今更であるが彼の言葉は全て「あー」とか「つー」とかである。赤ん坊なのだから当然のこと。

それを意訳してお茶の間に届けているこの作業。早くも苦痛と化してきたのだから気が滅入る。

そして彼はそのまま寝た。

寝る子はすくすく育つと「ひがい」のまま眠るよう死んでくれたほうが世のため人のため。

何よりも罪の無い母親が救われるような気がする。

「ふふふ・・・凄い旺盛な食欲ね。」

ちゃんと食べたのを見て安心したのか文香は満面の笑みを浮かべた。母親としては至極真っ当なセリフなのだが、それが向けられた相手が彼となると複雑な気分である。

・・・「こ、こに聖母があるきん。眩し過ぎて目が開けられな
いんじやあ・・・

せめて彼女の元で彼が真っ当な道を歩めるよう、祈るしかるまい。

余談ではあるが母子家庭で父親は蒸発済み。

あまり良い人ではなかつたそつ。

ふるるーぐ2（後書き）

全体的にプロローグは短いです。
なぜかあまりネタが思い浮かばないもので・・・先のほう先のほう
はガンガン思いついているのですが。
よつて、ちやつちやと進めることにしました。

ポジション（前書き）

これにてプロローグは終了。

子が育つのは早いと言つが、それを証明するが「」と、あつとこう間に9歳となつた響が居た。

彼が通うこの小学校にはヒロイン候補がいる。言わずもがな、高町なのは、月村すずか、アリサ・バーニングスである。

もちろんのこと彼は煙たがられた。

なぜかと言えば単純明快。

変態でキモイからだ。

さらに言えば残念ながら厨二病は治らなかつた。

「やあ、アリサ、すずか、なのは。」

「お、おはよー。」

「・・・響君・・・おはよー。」

「いい加減殺したくなつてきたわ。」

にこやかな響の挨拶には、すずか、アリサはげんなりとして応える。

いや、アリサは応えてなかつた。いや、これはきっとアリサ流の返答なのだろう。

いいぞ、もつとやれ！！

大丈夫。ちょっとだけだから。ちょっと殺すだけだから。

今なら一万円上げるから。ね、ちょっとそこの人気の無いところに連れてつてさ。

こづ、サクつとね？

「今日も可愛いね。」

「あ、ありがとう。」

「そ、そりでもないよ」

「・・・そんなことどうでもいいからとどどっか行つてくれない?」

なぜここまで彼が嫌われているかと言つとそれは彼の口のひの目線である。

簡潔に言つとエロい。

人間といつのは鈍く見えても意外と敏感で、たとえ今田の前で起つてこられるように相手が下心を持つて近づいてくればもちろんのこと分かる。

目線で、もひバレなのだ。

じろじろと撫で回すような視線。

変態じやない彼女達にとつてそれは酷く不快感を与えるものだつた。そつした下心を隠せる巧妙な男もいるが、こちらほど性質が悪くないのが唯一の救いである。

「ていうか、あんたどうしていつもいつも私たちのところに来るのよ。毎回言つてるでしょー寄つてくるなつてーー！」

「ふつ、野に咲く可憐な花を見に来てしまつのは、美しき蝶の宿命さ。」

「はあ?」

ふくつ・・・くくく・・・美しき蝶ね?

宿命とか・・・ふはつ!..

失礼。つい失笑してしまつたのだが、次の問題がコレである。これまた簡潔に言つながら意味が分からぬことを言つてゐるといつだ。

思い出して欲しい。

彼女達は9歳児である。

そんな気障な話をされたといひで彼女達の脳内では「野に咲く花に蝶が寄つてくるのは当然のことだよね」とこつそのままの字面で受けとつている。

すなわち。

「この話の流れでいきなり蝶の話をされても意味が分からんだけど?」

「おや? わからなかつたのかい?」

ふふふ、初心な子羊ちゃん達だ。」

「ああ、?」

アンタバカにしてんの?」

「あ、いや、そうではなくてだ。これは野に咲く可憐な花を君たちに例えて——ぶるはつ!-?」

「あ、アリサちゃん。さすがに殴るのは・・・」

「いっからいいから、ほら、とつとと行きましょ。」

「ぐふつ・・・シンデレラ。現実のシンデレラとはかくもシンデイものなのだな。」

こうして彼の勘違には増えていくのだった。
とこりか、もつとやつてくれないだらうか?
もつと熱くなれよ!-!
びつしてそこで去つちゃつんだ!-!
あとちよつとで殺せるんだぞ!-!
もつともつともつと熱くなれよ!-!

あ、良い忘れたが彼の口調にも問題はある。

何よりも致命的なのが彼のその勘違いスキルにあった。

彼が煙たがられているにも関わらず接触を持つとするのは、別に嫌われていることに興奮する性質を持っているわけではなく。ただたんに恥ずかしがっている、素直になれないだけと考えているからである。

すなわち。

嫌われているのにも関わらずしつこく空気の読めてない人間がこれまたしつこく話しかけてくる。非常に嫌な出来事と言えよう。

そして、そんな彼の行動はとある結果をもたらした。

「てめえ、いい加減にしろよ…なのは達が嫌がってるだろっ！？」
「何を言う？」

君こそ彼女たちを開放したまえ。きっと君が脅しているのだろ？」「はあ、はあああっ！？」

そう、新たな転生者による苦情である。

彼は原作非介入派であまり下心を持たず、なんやかんやでなのは達に気に入られた転生オリ主。

なのは達に日々無自覚な嫌がらせをしつづける響に對して文句を言いいに来たのだ。

なのは達がなんだかんだで響を退け切れないのは彼が生理的に嫌いでも悪人では無いということに起因する。

相手に悪気が無く、なんだかんだで直接的で決定的な害が無いために特別お人よしな彼女たちとしては彼を退け切ることは出来なかつたのだ。

そんな中立ち上がったのが、チートオリ主の彼、山田君（仮称）だ。

個人情報保護法のため、この場では仮名を使っている。

彼はいたつて普通の両親の元に生まれ、原作怖いとか良いつつもご都合展開によつてなぜかなのは達と近しい展開になつたという背景を持つ。正直此方のほうが我らがバカな主人公よりも腹ただしい気がする。

原作介入したくないとか言つておいて、どうせがつたり介入するんでしょ？

フェイトの母親に「なんでフェイトを娘と見てやらないんだ！！」みたいな熱血な説教するんでしょ？

どの口で原作に介入しないとか言うのか。

いや、それこそが主人公体質と呼べるものなのかもしねり。

残念ながら響にはそれが無いようである。

そしてなぜか「名前で・・・なのはつて呼んで！」みたいなフラグを立てつつも現在、響にとつては程遠いチートハーレムを形成しつつある山田君。

今回の案件も彼の好感度はつなぎ登りで、響の好感度は格段に下がることとなるだろう。

山田君はきっと「かませ犬ありがてえ」など思つてゐるに違ひない。

と言つたら彼は怒つてこういうだらう。

「ただあいつらの笑顔が曇るのが見過せないだけだ！！」

はいはい。主人公やつてますねえ。
無欲アピールとか要らないです。

「は、話が通じねえ。」

「まあ君の気持ちも分かる。」

だがね。彼女たちが迷惑してるのは歴然たる事実であつて——
「いや、だからオマエの行動が・・・」

その後、結局平行線のまま話は終わった。

そんなある日のこと。

彼の勘違いが解ける日がよひやく来たのである。

発端は放課後。

彼のチートの一つにおひぱいチートと呼ばれるものがある。彼が求めたチートで恐らく未来永劫誰も望まないであろうもなく見てそのチート内容とはおひぱいを自由自在に操ることにある。色々語りたいのは山々であるが、それは後の機会に譲るとして、話を進める。

そう。

あらうことか彼はなのはの——幼女の胸を揉みしだいたのだった。そこに至るまでの経緯はあまりに見つともなく、しうもなく見ていられなかつたので省くが年頃　　とまでは行かないが女の子が胸をイキナリ———それも嫌いな男に揉まれたらどうだらうか？もちろん怒る。

下手をすれば精神的な傷。もといトラウマも与えかねない。

彼はそんな致命的かつ最低なミスを犯してしまつたのである。

もちろん彼は無理やり揉むなどと言う外道ではない。

勘違い野郎ではあるものの、よくも悪くも日本人なのである。

悪人ではないし、そんなことを考えたことも無く、むしろ女性関係に関しては初心なくらいである。

歯の浮いたセリフを吐けるのも、彼女たちがまだ小さく、幼女だからであり、忘れているかもしれないが記憶を持ったまま転生した彼にとつては娘のような———歳の離れた妹のようなもの。

なんだかんだで別に欲情していたわけではない。
といふか当然のことである。

しかし——いや、それがゆえに悲劇が起つた。

彼の認識ではあくまでも好かれていると思つてゐる。
なおかつ、自分よりもはるかに年下の——もとい今はまだ子供と
してしか見てない、なのは。

彼は善意で将来的に胸が大きくなるようにチートを発動させておこ
うと思つたのだが、それが良くなかったのである。
とても身勝手で自己中心的な善意。

すなわちありがた迷惑は無常な現実として彼の身に迫つた。

大問題となつたのである。

まだ一次成長も迎えてないとはいえ女の子の胸をがつたり揉みしだ
いたことで親御さんにも伝わり、もちろん彼の母親の文香にも伝わ
つた。

なのははなのはで号泣。

先生にも伝わつたし、すずかやアリサは完全に軽蔑する眼差しをむ
けるようになり、彼の一切合切を無視。

なのははなのはでしばらくの休校の後、復帰。

彼を避けるようになつたものの、なんとか立ち直つたようである。
もちろんクラスのほかの子にも伝わり、あらゆる場面へと彼の行動
の結果が伝播した。

虐めを心配した文香が転校を薦め、響も転校を望んだ。

そう。

彼の勘違いは1人の女の子を泣かせてようやく解けるほどに重症だ
つたのである。

もちろんのこと、彼は嘆いた。

泣きながらに謝った。

許してもらおうだとかそんなことは微塵も考えず、ただただ申し訳なさで一杯でひたすらに謝った。

もちろんのはの父親や他家族はそれで許せるはずも無いが、子供のやることとして許したと言つことになつた。

そうしたけじめを付け。

彼はなのは達が通う学校を後にした。

彼の後姿はまるで別人のようだったといつ。

主人公の一日（前書き）

このまま三人称でいくか、主人公視点にするか。迷い中。
その件に関して感想をいただけると嬉しいです。

主人公の一日

あれから半年の月日が流れた。
彼はと言つとそれはもつ、猛省した。

『大丈夫ですつて。そろそろ頑張つてみましょ？』

「そうだろうか・・・アイシテル。俺は怖い。また大きな罪をこの手で犯してしまうのを・・・」

『はい、その言い回しは厨一くさいので直しましょうね。』

「・・・俺は厨二じやない。もう目が覚めたし。』

『厨一の人は誰もがそう言つの。』

今彼が居るのは自室。

神様から貰つたチート特典の一つ。

神様に用意してもらつたデバイス“アイシテル”と話している。二対のナイフ型デバイスであり、片方はベルカ式でカートリッジを搭載しているため、非常にゴツい。

もう片方はすらりと長いスリムなミッド式の魔法が組み込まれたナイフである。

近接戦や身体強化に置いて優れているベルカと、小手先や技術、手数の多さに優れているミッド式。

どちらの魔法も満遍なく十二分に使えるという特殊なデバイスである。

待機状態はナイフを模つたネックレス。服の下に入れておけば一番目立たない形である。

普通のインテリジェントデバイスよりは遥かに感情豊か。ちなみにドイツ語を喋つている。

良い機会なので彼のチートを振り返つてみた。

まず一つはその姿。

銀髪オッドアイ。

しかし、これは現在では意味を成さなくなっている。
アイシテルによる変装魔法で一般的な黒髪黒目の人間にしているの
だ。

理由は言わずもがな。

二つ目は神様印のデバイス。

アイシテルの性能は下手なロストロギアよりも強力で、ジュエルシ
ード並みの魔力貯蓄機能があつたりとチートらしいチート。なのだ
が、どんなスーパー・コンピューターも扱う人が幼児並みの知識と能
力値しかないので、宝の持ち腐れ、豚に真珠、ぬこに小判、という
もの。

一度もセットアップしたことが無い。

彼はこの世界について美少女がヒラヒラした服を纏つて飛び回る。
程度の認識しか持つておらず（逆に言えば彼にとつてはそれが全て
であり、それで十分だった）、そもそもデバイス自体この世界のコ
ンピューターだとしか考えていらない。

もちろんこの時点からして勘違いなのは言うまでも無いことである。
何が言いたいかと言うと、彼はデバイスを単なる便利な魔法が使え
る生活を助ける道具、程度にしか考えておらず、戦いに使えるなど
と微塵も灰燼も気づいていないのだ。

そしてそれを知りつつも面白そうだと言いつことで放つて置くアイシ
テル。

これまた現状では使えないチートである。

三つ目は言わずもがな我らが夢。おっぱいチートである。
よく考えて欲しい。

全てのヒロインに直面する絶対的な悲劇とはなんであるうか？

・・・ 引っ張る意味も大して感じられないのに早々に明かしてしまったが、それは「老い」である。

どんな可愛いヒロインも時が流れれば老化し、言い方は悪いが劣化する。

いつまでも若々しい姿で。

これはほぼ全ての——容姿に自信を持つ人間であるほど必ず抱く欲求の一つではないだろうか。

もちろんアニメを見ていると、いつ立場であるならばなんら問題は無かったのだが、同じ世界に現実として生まれた以上は、そうしたヒロインの姿も見なければならない。

自然の摂理とは言え、それを解決する手段があれば望んでしまうのが人の業という物だ。

耳障りは悪いが、おっぱいチートはそんな夢を叶える最高のチートと言える。

劣化によって垂れるおっぱい。

垂れたおっぱいは一度と床らないと言つのが現在の学説で、事実そうである、らしい。

巨乳キャラであればあるほど何十年後かにお世辞にも綺麗とは言えない肢体を晒す事になる。

もう少しオブリークトに包むべきなのだろうが、どんなに言つ繕つても、厳然たる事実であり条理である。

ゆえに目を背けるよくなことはしてはならない。

二次元に置いてはそんな心配はいらなかつたものの、その世界に暮らすとなれば10年、20年と先があり、魔法的な何かが無ければ等しく老いたりばえ、おじいちゃん、おばあちゃんなど化す。

加齢臭もするだろうし、皺も増えていく。

背骨が曲がり、筋肉や脂肪がこぼれ落ち、歩けなくなるかもしけない。

だが安心してくれ。

このおっぱいチートは微乳、ひんぬう、巨乳、爆乳、横乳における曲線美の調整や下乳において良く見えるようになり脂肪の配置や柔らかさを微妙に変えることによってうんぬん、あのキャラが巨乳であれば、ひんぬうであればという願望を叶えることもできる——「おっぱいを操る程度の能力」ではあるがその能力にはレベル2があり、そのレベル2はまさしく神の御業とも言つべき効果を發揮する。そう、名づけるとしたならばアンチエイジングEXである。

アンチエイジングとは意訳し、分かり易く簡潔に述べるならば老化防止のことと言つ。

とはいえて生きていれば老化していくのは自然、老化しないのは不自然である。

防止と言つよりは抑制といった方が正しいか。

そんなアンチエイジングの効果を極限まで高め、全く別物し、上記の正しく老化“防止”を実現させたおっぱいマッサージ。

それがレベル2の効果だ。

具体的なメカニズムを語るのは省略するが、とにかく凄いおっぱいマッサージで老化を防止し、どうにかしておっぱいの時を止め、しかしおっぱいはおっぱいという単体の生き物ではない——ゆえに体にもその時の留まりが影響し、すなわち寿命で死ぬことは無い不老と化す能力。

畏怖されるべき異能である。
リアスキル

戦慄してくれても構わない。狂喜乱舞してくれても構わない。

どこの学園都市であるならば女性研究者によつて研究され尽くすである「この」の能力。

おっぱい——いや、胸を揉めば男にも効果を發揮する正しく等しく全てのおっぱい——男の場合は胸とする——チートをせるこの能力。

もしあれれば比喩ナシに眞面目に解説されるに違いない。

と熱心に語りすぎたところで閑話休題。

彼は自室でアイシテルと話しながらもとある本を読んでいた。

『猿でも分かる乙女心』

そつ、彼は勘違いスキルを消し去るつと努力しているのである。
涙ぐましい努力。

その姿に拍手をせざるを得ないが、したとこりでなんだといつのは明白。

とつあえず拍手は自重した。

「アイシテル・・・乙女心はかくも難しいんだな。」

『それを読んで分かった気になつてたら、また勘違いするよ。あつと。』

「・・・どうしてそういうことを言つんだ。頑張つてんだから応援してくれれば良いのに。」

『だつて・・・せつかく間近で勘違い系主人公の滑稽な姿を楽しめるからと神様に志願したのに。結局良い子ちゃんっぽくなつてるんだもん。私つまらない。』

デバイスは志願制らしい。

「・・・俺を怒らせると酷いぞ?」

『じつするつていうのよ?勘違い坊や。』

『納豆』はんに混ぜ込んでやる。』

汚いと思うよ？

そして君は金属の塊を食べようと言つたのだろうか？

『ぶふつ！？な、なんていう鬼畜。げ、外道つ！！外道だわつ！？私の美しいボディが納豆菌で汚れるじゃない！？』

「嫌だつたらこれを教える。』

『ん・・・何々？

葛藤？これが何？』

「かつとづーーーつて読むんだな。』

『・・・。』

デバイスがアホの子を見る目で見つめた。

目、無いんですけど。

「しょ、しょうがないだろつ！？

中学一年の時に死んだんだから、学があるわけじゃないんだよつ！

！』

そして彼は本を読み終わるとおもむろに胡坐をかき、手を股のあたりに置く。目を瞑つて身じろぎもしなくなる。

瞑想である。

ちゃんとしたオリ主であれば瞑想と聞けば「体内の魔力を感じ取る訓練か！」とティンと来るものだが、彼の場合は違う。

彼女達の将来が楽しみがゆえについついエロい視線を向けていた——もといこの色欲を抑制する訓練である。

まず彼は魔力がどうとかというよりもその人格の矯正から始めた。アホである。が、切実な問題でもある。

瞑想をし、できれば悟りを開くのが目的だが、ドウ考へてもそれは無理に違いない。

彼の思考回路を除いて見る。

おっぱい・・・無限のおっぱい・・・

いや、待て待て。

おっぱいは違う。おっぱいなんていらないんだ。

だがしかし、おっぱいというのは如何せん俺の心をつかんで離さない。

これほどまでに拒絶してもおっぱいが出てくるということはもしかり。俺の心に巣食うおっぱいはただのおっぱいじやないんじやないだろうか？

きっとおっぱい型宇宙人などが俺の精神から侵略し、体をのつとつ、俺の体のいたるところをおっぱいに変えるに違いない。

それは嫌なようで嬉しいかもしない。

そもそもおっぱいチート 자체、おっぱいを揉むための口実がてら貰つたようなものだし、自分の体がおっぱいとなりえるなら誰かのおっぱいを求めて徘徊せずに済む。が、自分の体のおっぱいで俺は満足できるのだろうか？

おっぱい神としてーーーいや、おっぱいの神を召喚るのはまだ早いか。

最低限おっぱいスカウターの技術を会得しなければーーー

といふかおっぱいを考えていたら肉まんが食べたくなつてきた。

あの白い肌にホカホカの具。正直肉まん神。チヨコまんなるものもコンビニに売つていた気がする。

チヨコまん。中々惹かれる。そういえば犬にチヨコを『える』といけないとか聞くが一体どうしてだろうか？

ネギもそうだったな。あ、ネギはあれか。ユリ科の植物か。

ユリ科の植物には毒が含まれるとかなんとか。だからかな？ たま

ねぎやネギは大丈夫なのだらうか？

今まで食つてたんだけど・・・いや、そもそもユリ科の植物だっけ？

非常にドウでもいい思考回路だつた。

結果から言えれば一年後ぐらいには彼はなんとか工口から脱する。

頑張ったね・・・うん。

「(ノ)飯よお。」

下の階から母親の文香が晩御飯に呼ぶ声が聞こえる。

「(ノ)して彼の一日は終わる。

フレシアテスタロッサ
P.T.事件の始まりはすぐそこである。

巻き込まれ始めた

「なにこれ？」

歩いていたら何かに出くわした。

黒い形にネコ……いや、ぬこの田をした珍妙な生き物である。なんか触手が生えていた。

「……」生き物もいるんだなあ。」

響はそんなことを呟く。

もちろんそんな生き物がはびこるような世界ではない。

「つまつ……？」

『ふりてくしょ～んつー。』

触手が響に襲い掛かるがそれを基本魔法のプロテクションで防ぐアイシテル。

響は少し焦る。

田の前の黒い塊は何かの生き物にジュエルシードが憑依した姿。寄生、共生？ なんにせよ合体した姿だ。

合体したからといってなぜこんな形になるのかが意味不明であるが。

「」こんな気性の荒い生き物がこの街の近くに居たとは……知らんかった。」

『何言つてゐるの。これは生き物とこつより魔法生物なのよ。』

「ん？」

生物には変わらないんじよ？』

『ただけどそりぢやない……とこつかそれどんじやなことい

うか。ほら、キタつ……。』

「はつ？」

つてぎやあああああああつ！？」

さらに触手を増やして攻撃を続けてくる黒い塊。

アーメであるならばただ黒いだけだが、いまやこれは現実として田の前にある。

うごめく体はどうも肉質的で結構気持ち悪い上に、そこかしこから触手が生えてそれが突き刺そうと襲いくる。そして田玉は大きいのがそのまま実写化されたもので、正直下手なホラーよりもグロイ。当然のことく一般人気質の響は声を荒げた。

そして逃げた。

『ちよ、ちよつとつ！？

た、戦わないのつー？』

「あれと！？バカじやないのつー？

あんな意味不明な生き物と戦うとかバカかつー？』

『誰がバカとつー！？

所詮私の玩具のクセに私をバカにするとは……ちよつと生意気じ

やない？』

「誰が玩具かつー！？」

とか言い争いながら逃げる響。

そして触手に足をとられた。

「や、やばつー！？」

え、これ？どうされるの？何されるの？

食べられちゃう？頭から丸齧りですかつー！？

『ふふふ・・・ぞまあ。』

「ちょ、おまつー！食われる前にアンタだけは壊すつー！？」

『そんなこと出来ないでしょ！。ほり、手まで巻きつかれて。』

「うつおおおおおおつ！？」

しまつたああああつ！手が・・・手が引っ張られるつ！？」

『そのまま丸齧りされてね、響。』

「ちょ、えつ！？マジで助けてくれないのつ！？ていうか助けられるつ！？」

『確かに助けられる。でも嫌。』

「えつ！？だめもとで言つただけなのに・・・最近のパソコンパナイね。つていうか、助けられるんならハヨう助けんかつ！？」

『ええええええ・・・気分じやない。』

「気分で人助けとかどんな鬼畜ですか。ホントまじ助けてください。」

『ていうか、わつも助けたから良くないかな？』

『いやそんなこと言つてる場合じやなーーやっぱつ？ほんとマジやばい、やっぱする。お願い、ほんとお願い。お願いだから助けーーーぐおおおおおつ！？間近に牙が、牙が迫つてるつ！？

てこうかこんな場所に口があつたのかつ！？ヒトデみたいなやつ・・・とか言つてる場合じやなくてだなつ！？

も、もう・・・ほんと限界。』

閉じようとする口に手を当てるなんとか閉じられないようになると頑張つていいのだが、如何せん態勢が悪い上に腕もふるふるしてきた。彼の精神年齢は20台ちょっとであるが、肉体年齢はあくまでも9歳なのだ。

それでも仮にも動物のアゴの力に耐えられてるのはさりげなくアイシテルによる肉体強化の魔法があるからである。しかし、口のままでは黒い塊の糞と化してしまつ。

「くわおおおおおおおおおつ！...」こんなはずじやなかつたのについ
いいいつ！...』

悪役が死に間際に発するようなセリフを書いてフルフル震える腕が外れそうになる。

さすがにみかねたアイシテルが助けに入らうとするがそれよりも重大な案件が発生した。

もとい元祖主人公である高町なのはの登場である。

本来の歴史とは打って変わつて、すでに変身済み。なおかつリンカー・コアを求めるこの黒い塊に襲われるのはユーノであり高町なのはであるはずだった。

そこへ通りかかったリンカー・コアを持つ生物。もとい響は丁度言い獲物であつたのだ。

その戦闘時の余波をかぎつけたユーノ・スクライアがなのはに助力を請い、レイジングハートを手に取りやつてきたというわけである。

「さあ、救援かつ！？」

人の気配に振り向いた瞬間、響は固まつた。

当然である。気まずさゆえにだ。

そこで響が起こした行動はもちろん。

「や、やばい・・・よりやばいぞ・・・つていつまで噛み付こうとしてんのつ！－！

邪魔だあつ！－！」

目の前の黒い塊を触手に纏わりつかれながらも蹴つ飛ばし、その辺の庭の草むらに隠れることだった。火事場のなんとやら。といづやつだ。

「戦略的撤退と言つやつだな。うん。」

『逃げてばかりじゃダメだと思つよ。』

「やかましい。これは俺のためではなく、彼女のためだ。夜の街を飛行してこるとこな、こきなりいつぞやの変態が現れてみる。むしろ俺を見て逃げかねんだろう。』

『・・・確かにそうかもしれないけど可哀想なくらいにみじめな気遣いね。』

「・・・うるさいやー。」

『どうか飛行することには突っ込まないの?』

「え? ああ、そういうえば飛んでるけど・・・す」『テクノロジーだな。オマエといい、今の地球はやたらとか科学力が高いみたい。空も飛べるのかあ・・・アイシテル、俺も飛べないの?』

『飛べるけど・・・普通に受け流すのね。』

「死んだ時にこの世界は空を飛んで弾幕芸ショーティングゲームをする少女達がいると聞いていたからな。」

『しゅ、シユーティング・・・』

「あ、それより見てみろ、なんか倒したみたいだぞ。ていうか、今更だけどあの黒い塊つて何? それと氣のせいじゃなければフェレットらしき動物が喋つてる氣がする。」

『とりあえず帰らないの?』

「そうだな・・・すつこに疲れたし、腕ぶるぶるしてるし今日は早く寝よ。』

『んじゃ結界抜けるね。』

「なんか良く分からんが了解だ。どうせなら空を飛んで帰りたい。』

『はいはい、ええと空を飛ぶやり方は・・・』

こつして響はリリカルでマジカルな世界に片足を突っ込むのであつた。

「「これ、 やんなくちやだめなの?」

『 また襲われるかもよ?』

さて、俺はといつと特訓することになった。

なぜかといつとアイシテルの話によるとまだこんな感じの出来事が起きたらしい。

じゅえるしーどとか言つ厨一な名前のアイテムが街のあちらこちらに落ちたとかなんとか。その結果なんちやらかんちやらとか。厨一過ぎて聞いていられなかつた。

よく分からなが、あんな生物に襲われるのは勘弁なので少なくとも逃げられるような魔法は使いたい。

「えーっと、 まずは何々?
アイシテルセットアップと言いましょつ・・・とな?」

そのためにもアイシテルの取り扱い説明書を読んでいる。
アイシテルが口で説明するのが面倒だから勝手に読めといわれて作られた冊子である。
こんなことを言えと要求していくとは。
アイシテルだつて厨一じやないか。

「アイシテル・・・せ、 せつとあ~つぶ。」

小声なのは仕方ないよね。
恥ずかしいし。

すると胸のアイシテルがぱつと光り、アイシテルから自信を守る強靭な衣服をイメージしろとかいわれた。
強靭な衣服つてなんだよ。

綿100パーセントの服じゃ駄目と呟つことだらうか？
ポリエステル繊維を使えと？

『そういう意味じゃないつ！あほつ！』

もう一つそのこと鎧でいいじゃんと考へたら服が脱げた。

・・・なぜ？

意味が分からぬ。

上着が溶ける様に消えていき、次にズボンが溶け消え、パンツが最後にはじけ飛ぶ。

確かに魔法少女的なアニメの变身シーンでは脱げるのがセオリーだが、男子子でも変わらないのだろうか？

そして体が西洋鎧に包まれる。

俗に言うフルプレートメイルで、肌の露出部分が無くなつた。
そしてゴツイナイフが一本とすらりとした眺めのナイフが一本。
両手に一本づつ出現した。

「ゴツイナイフとはいえ、西洋鎧姿には合わぬないか？」

『ならさらに剣もイメージして腰に差して置けば？』

「じゃあそうしよう。」

うむ、なんかそれっぽくなつた。

ただ身長が足らないのでなんか気持ち悪い。

『じゃあその姿のまま裏山にでも行つて見ましょか。』

「裏山で練習？」

『そゆこと。』

てなわけでパツと移動して裏山。

取り扱い説明書にしたがつて順々に練習していく。

とりあえず一度使ってみることを目標にさまざまな魔法をやっていくと、重大なことに気づいた。

「・・・なんか攻撃系多いな。」

そこそこでしょ？ 私アリマトテバイヌたし

『一九三二年

とにかくやつとやつてみたわけだし、
模

模擬戰？

卷之三

「一ノ瀬」

もし誰か惚れ

17

「・・・た、確かに。むしろ積極的に言いまくりたい!」

一
で
三
号
一
一
」

やばこ、かつじいこんじやないだろつか。それ。
もうと決まればせりをとやくつりーーー。

『んじゃ今、出すから。』

何を？

「なはつ！？」

目の前に音を発して現れたのは銀髪オッドアイの——いつぞやの

俺だった。

野郎が何見てんだ「ラ的な田線をくれていい。

「あ、あてつけか?」

『おつとど、間違えちゃつた、テヘー。』

「・・・まあ良い。模擬戦といつことならば、こいつに斬りかかって問題ないんだよな?』

『まね、そう簡単にはいかないだらうか?』

「・・・ふふふふふ。よしきた。殺そう。こいつを殺して俺は過去から決別するんだ。』

すらりと腰から剣を抜く俺。

そしてそれを見て、銀髪オッドアイの――イタイやつも虚空から剣を出した。

「俺に挑もうとは・・・バカなやつだ。なのは、見ていてくれ。今俺がオマエに纏わり付く蛆虫を殺してやるからな。」

「殺せるもんなら・・・つておいいにいつー?」

『何?』

「いや、何じやないよつー?」

あれのセリフどうなつてるの?――『ていうか彼女、今ここにいないよねつー?』

『半年前の響を再現してみました!』

「せんでいいつー!――『ていうか、あれか。これを倒すまでこれを相手しないといけないの!?』

『もちろんサア!』

「お、おまえ・・・ほんと鬼畜な。』

げんなりする。

とつとと斬り捨ててしまおう。

そうだ、それがいい。

「せこやつー！」

「ふつ・・・さすが非モテ君だ。剣筋がなっちゃいない。」

「いはつー？」

オマエも非モテだろーーと思いつつ。

振った剣はかわされて、俺に向かって俺が蹴りを繰り出してきた。しかし俺は負けじと態勢を立て直し、俺に向かってもう一度しかける。

俺はその銀髪の髪を気障つたらしくかきあげ、俺に向かって再度力 ウンターを放つ。

しりもちをつく俺。

そして愚者を見るかのように見下してくる俺が田の前に突っ立てる。

非常に腹が立つ。

ていうか、俺が相手だとややこしいなつー！？

とりあえず目の前のコイツは厨房と呼ばば。 で、厨房は俺に向かって

「僕としたことが・・・つい本気になってしまった。許してくれた まえ。」

殴つて良いだろーか？

というか殴れないんだった。こいつ俺のくせに強かった。

魔法とか魔力とか使って思いつきり忌々しい過去¹と吹き飛ばす もりで攻撃しても死んでくれない。

俺は日が暮れるまで厨房に斬りかかり魔法をうちまくったのである。

フラグが立ちそうで立たないんだ

困ったことに厨房に手も足も出なかつた響。

その晩、彼が枕を濡らしたのは書くまでも無い。

さらば」一週間ほどが経ち、段々劍を振るの慣れてきたが、つてみると、なにやらひし形の宝石のようなものを拾つ。

フェイ特・テスター。その人である。

「それを渡して」

鎌状のものを向けられ、焦る響

三國志

「むむっ！ なにやつっ！！

瞬時にアイシテルをセットアップ。鎧を発現させずにナイフのみを手に持つた。

にビビって武器を構えたというのが大きい。

少し逃げ腰になってしまふのが哀愁を説いてゐる

「・・・渡してくれないなら力づくで――」

卷之三

・・・あ、ありかど、

力チャと武器を構えたフェイトにジギツた響は即ジュエルシードを

渡す。

響は小声でアイシテルと相談した。

「・・・ちょ、この子この歳で武器持つて脅し取るとか！？」

『きつとろくな教育をされなかつたのね。かわいそうに。』

「それ以前に表情を全く変えないあの余裕・・・強者とみた。」

『ええ、響よりも大分魔力が高いね。振る舞いもデバイスを振るうことに対する慣れがある。』

「魔力つて・・・デバイスを動かすのに必要な力だつたよな？」

『そうよ。』

「では彼女の持つているものもデバイスだつたりする？」

『そうね。』

「また武器か。・・・もしかしてデバイスつてパソコンの進化型とかじゃないの？」

『今更すぎてデバイスの私は涙目。』

「き、気づかんかった。」

『・・・』

「まあまた、ほら。一度死んでるからさ。死んでた間にそんな感じの物が出てきたのかなあとか思つてたわけで。」

『・・・それにしても気づくと思つけど。他の人は持つてなかつたじゃないの。』

「いや、高級品のなかつて。」

『・・・』

「まあいいじゃないか！ほら、結局のところアレでしょ？」

アレアレ。あの・・・あれだよ。デバイスつてのは魔力とやらを持つものが使える護身用の武器とか・・・そんな感じでしょ？それを脅しに使うとは・・・許せん。彼女のためにも説教してくる。あのままでは将来的に犯罪者の仲間入りしかねない。』

『・・・止めはしないけど。』

響はこうしてアホな行いへと走るのである。

ちなみに彼女はすでに犯罪者の仲間、といつか娘である。

「ちゅうとやーの君。」

「・・・何か用?私は忙しい。」

ちゅうとイラシとしてる氣がある。

反射的に謝りやうになつたけれどもこれを我慢する。

「こ、忙しいことに申し訳ないんだけどイキナリ武器を構えて脅し取るのはどうかと思うんだよ、お兄さんは。うん。」

「貴方から構えたのに?」

「え?」

そりだつけ?

「ちゅうだよ。私から構えたわけじゃないし、望んで貴方に危害を加えようとしたわけでもない。」

「そりだつたか・・・あ、えと・・・だからとこつて・・・

「・・・話すことは何も無い。それじゃ。」

「あ、はい。」

そのまま去つていくフェイドを見送る響だった。

「俺、間違つてたか?普通に考えてあんな怪しいコスプレして鎌つぼいのを持つてゐやつが居たら警戒してしかるべきだよね?」

『・・・とりあえず帰ろつか。』

「・・・うん。どうでもこによな。正直言つとお近づきになりたい

とか思つていたのだが。「

次の日。

響は図書館にいた。

猿でもわかる乙女心を返しに来たのだ。

「次はどんな本を借りるべきか・・・乙女大図鑑・・・乙女はいつもして男を選ぶ百選・・・女の子は複雑なのだ・・・女子の憂鬱・・・女の子の気持ち・・・全部借りるにも小学生は一冊のみだし。」

返し忘れなどを防止するために図書館では年齢に応じて借りられる冊数の上限が決まっている。

小学生は一冊までだ。

「つと、あ、すいません。」

「いりません。」

本棚を見ながら横歩きをしてると人どぶつかる響。

響の視界にまづ入ったのは紫色の髪の毛。

紫とか人類的にありえないなあとか自分のことは棚に上げて少し驚く響。

今では黒髪黒目としているのだが。

「・・・とこ、うか紫とか懐かーーーおおおつーーー。」

「あの、どうかしましたか?」

瞬時に顔を逸らした響。

月村すずか。彼女はいりませんの図書館にやつてへる常連さんである。

響は響で毎度の「ごとく焦る。

最近焦つてばかりだと内心思いながらも響は気づかれないようになると声を若干高くして、なおかつ顔は俯いて顔のつくりを分からないようにした。

どおりでどいかで見たことがあるわけである。

「いえ、別にどうもしないです。んじゃ、俺はこれで……」

「ん? あ、でも本は良いんですか?」

「あ、いえ、見つからないみたいなので……出直そうかなあと」

「職員さんに聞けば良いと思いますよ?」

「いえ、その……あの……人見知りなので……それでは。」

その場から離れるためのとしさの嘘であるが、俯いてることと言ひ拳動不審気味なところと云い、すすかは納得し、それならば、と手を合わせて提案する。

「……うーん。なら私が変わりに聞いてあげましょうか?」

「エ、? いや、あれですあれ。そんなことしてもううのも……」
「別に気にしなくて良いですよ。ついでに私の探してる本も聞くつもりですし、気にしないで下さい。」

「……すっごいエエ子や……」

「え?」

「あ、なんでもないです。……まあやけめで言つならお願ひします。」

重ねて言うが彼は悪人と言つよりは善人よりである。

そんな彼が他人の親切をつつけんどんに跳ね除けることは出来ず。しかも見ず知らずの人に親切をするという今時の若者には珍しい心優しさに感涙し、自分の昔と彼女とを比べながらその酷さに嗚咽しけつとも、響はなんとか彼女の親切を受けることにする。

実際困っていたのは本当で、司書さんと聞くつと想つていたといふ
でもあるため聞くことに関してはなんら問題は無い。

「あの、すいません。」

「はい、なんですか?」

「えーっと私は動物の——特にネコに関する本を読みたいの
ですが——」

いや、問題はあつた。

響は気づいたのである。

俺の借りる本の内容はちょっとと聞かれたくない。と。

別に職員さんならば構わない。

わざわざ職員にまで気遣つてたら図書館で本など借りられない。知
られたく無いとこつ思いもあるあるがそこはやむをえない」と
だ。

借りる際こどのみち見せなくてはいけないのだからして。

だが、彼女に聞しては別である。

普通に気まずい。

とっても気まずい。

一応同年代の女の子 ではあるものの中身的には妹とか娘とか
そんな感じの歳の子。

この歳 といつても9歳だが——で子供に自分の情けないと
こうを曝け出すよつで非常に恥ずかしい。仮に同年代でも恥ずかし
いけれど。

確かに響の昔はアレであった。

アレ過ぎていたが今は少なくとも改心し、直していくべく頑張つて
いる最中なのだ。

今の自分にそのような羞恥プレイはレベルが高すぎた。
田の前の少女が少年であればまだマシだったものを。

ゆえに彼は致命的の一手を取ってしまった。

「それで、貴方は何を借りにきたの？」

「え、お、俺は・・・えと・・・アレだよ、あれ・・・えーっとネ、ネコの本かな?」「うんーー!」

ここだけで見れば見事な回避とも思つが、チョイスがダメだつた。

「へえ、貴方ネコを飼つてるの?」

「え、い、いや、ネコを飼いたいとは思つてるんだけどね?あ、でもそつそつ氣軽に飼おうと思つてるんじやないよ?」

ほら、動物は生き物だから可愛いだけじゃなくて飼う上での辛いことや氣をつけなくてはいけないことが多々あるだろ?し・・・だからかな?まずは本を見てネコのことを良く知らなくちゃつて思つて・・・」

ネコを飼いたいと言われ、下手に嘘を付くとばれると思つたか響はまだ飼つていらない事についてネコについて詳しく知らなくとも問題ないようになに嘘をついた。

ひとつもの嘘にしては理由がしつかりしていて内心ほくそえみ、完全に誤魔化せた!と思つたのもつかの間。

「・・・す」「いなあ、その歳でそこまで考えてるなんて。

私も始めてネコを飼う時にお父様にそれを言われたの。立派だなあ。

」

「君も同じ歳でしょ?」

「え?あ、うん。だからこそ余計に凄いんだよ。」

といつて微笑む月村すずか。

その笑顔につい赤面する。」とは無かったが本当に良い子だなあと
ちょっと泣きそうになる響である。

もちろん昔の自分の酷さがあるゆえにそれと比べて自分が一体どれ
ほどアホだったのか。

情けなさ過ぎて悲しくなったのだ。

そしてこの嘘が響の首を絞める」ととなる。

職員さんに案内されつつ、道中で話しつづける2人。

「ねえ、貴方のお名前は?」

「え? あ、俺は・・・相馬ひ――」

「相馬?」

「あ、いや、そ、そそ、相馬ひかりだよ。」

危なかつたと小声で呟く響。

『それにしても氣づかれないものね。意外と。』
「・・・多分それだけあの髪と目の色が印象深かつたって事でしょ。
・・あまりの性格の違いに同一人物だと思われてないってのもある
だろうし。』

念話で会話をする響とアイシテル。

余談であるが先ほどの嘘はアイシテルが念話で響に指示したもので
ある。

もちろんアイシテルは今回の嘘の悪いところを理解して教えてこの
指示をしている。

アイシテルはお茶目なのだ。

お茶会に誘われて

「ねえ、ひかり。このネコはまだつ?」「

「ひ、これはまた可愛い・・・なんだこの可愛い。」

あれから一ヶ月ほどが経過した。

現在2人で仲良く読書中。

なぜこうなったかは特に語ることも無い。

共通の趣味。

それは友達作りや合コンでのきっかけとしてはあまりにもポピュラーでセオリーで常套手段である。

そう、ネコ。

ネコの話題に響が——正確にはアイシテルが響に乘らせるよう誘導してしまったのが運の尽き。いや、今はまだ美少女だが将来的に確實に美人となる女性と接点をもてたのだから男としては喜ぶべきである。

事実、響は喜んでいる。が。

それと同時に悲しんでもいる。

彼女に会いたくなかったのは言つまでも無く高町なのはと彼女が親友であるから。

親友を傷つけた人間に友好的に接するような人間はいないだろ?。ゆえに彼女と友達になつたところで本名を明かしてしまえばそれだけの関係なのだ。

どの道彼女にフラグを立てて、イチャラブすることは叶わない。

そのことに嘆き苦しんでいた。

不幸中の幸いといえばネコの本が意外と面白いということである。

気づいたら普通にネ「好きとなつていた。

「あ、そういえばね？」

「ん? 何。」

「今週末にお茶会があるの。ひかりも来る?」

「・・・「つづむ。」

「何か用事があるかな?」

「いや・・・その。別に暇ではあるけどさ。」

響が渋り理由は言わずもがな。

彼女のお茶会に誰が来るかと言つこと。

2人きりでお茶会をするなんてことはまずないだろ。

それならお茶会といつよつも普通に食事である。

「他に誰か来る? ていうか来るよね。確実に。」

「ええと・・・アリサちゃんとなのはちゃんていう私の友達とそのお兄ちゃん。あとはなのはちゃんと特に仲の良い男の子も来るの。大丈夫だよ? きっとすぐに仲良くなれるから。」

「いや・・・遠慮しておくれ。せっかくだけども・・・」

「どうして?」

「いや、だから人見知りだと何回言えば・・・」

「うして誘われるのは何度目か。

響はこれ一度きりではなく何度も誘われていた。

その都度断つってきたのだ。人見知りという理由で。

もちろん響とて行きたいことは行きたい。

別に人見知りではないのだし、美少女達と、将来のおっぱーーーげふんげふん。と近づける良い機会である。

下心を無しにしてもこんな良い子達と友達になれるのは光栄だ。

だがしかし。

もしバレたら？と考へると如何せん足が動かない。

ばれないとは思つもの、ばれた際のリアクションを考へると非常に気まずいのだ。

すずかだけにバレルのはともかくとしてもなのはにアリサまでいるとなるとせつかくのお茶会が台無しになつてしまつ。そんなりになつてしまつと響のみならず、彼女達も氣まずくなるだろうし、十中八九お茶会どころではなく、ばれたときの状況を考えると非常に気が進まないのだ。

とこつわけで。

「『めんね。悪いけど』の話は無かつた」と・・・

「・・・どうして？」

「え？」

「毎回思うんだけど、ひかりって私の事嫌い？」

「いや、別に。」

「その割にはどこか壁を作つてる気がする。」

「そ・・・そろかな？」

「お茶会、そんなに行きたくない？人見知りだつて早めに直しておかないとこれから先、苦労するよ？」

「え・・・つと、うん、それは分かつてるんだけど・・・」

「怖いのは分かる・・・なんてことは言わない。私は人見知りつてわけじゃないし、気持ちが十全に分かるんなんて口が裂けてもいえない。でも、頑張つて直そうとしない限り何時までもそのままなんだよ？」

「そ、そうだね。」

「じゃあ頑張るつよ。皆良い人達だからきっと助けてくれるし、ひかりの力になれると思うな。きっと今が良い機会。やるべき時だと思う。」

「・・・えつと・・・その・・・」

「ね?」

「あ、うん、じゃあひょつとだけ・・・お邪魔してもいい?」

「むひろん。」

「ひじて響の出席が決まったのである。

帰り道。

「・・・憂鬱だ。」

『押し切られちやつたねえ。結局。』

「・・・ああ。」

『真摯に相手を思いやる相手に弱いね、響は。』

「・・・ああ。」

『・・・大変だね。』

「・・・笑えるのを堪えてるんだら・・・分かつてる。その震えた声で話しかけるのをやめる。打ち殺すよ?」

『あれえ? そんなことを言つてもいいのかな?』

「あ、?」

『厨房を強化しちゃひづ。よつやく先が見えてきたところなのに、ここで強化しちゃひつとあと一年はあれと顔を突き合せないといけなくなつちゃうよ?』

『すいませんでした。だからそれだけは勘弁してください。』

『よひしこ。』

泣く泣く謝る。

「なあ・・・ほんとひづじよつ。バレルと思つんだ。意外と。」

『ひじて?』

「なのは・・・と俺が呼ぶのは馴れ馴れしそざるが。高町さんは被

害者だ。おやじく他の人間よりも俺の顔を強く覚えてる……と思つ。

『まあ確かにね。』

「誤魔化せるか結構な不安がある。いつそのこと風邪とか急用で休むのはどうだろ？」

『あそこまで言つたのに、状況からして嘘だとばれるんじゃないかな。下手したらお見舞いなんてこともあるかも。』

『さ、さすがにそこまでは……』

『彼女達はやたらとお人よしだしねえ。ありえないと断じるのは難しいんじゃない？もしくはすずかちゃんがお見舞いに行くねつて話になつてそこから皆で行く！なんて流れにもなるかも。』

『……そうなると文母さんを田撃されるな。』

『ばれるでしょうね。』

学校に親が呼ばれた時に、すずかやアリサが見てないとも言い切れない。

『いつそのこと女つてことにして女装したら？

まずはばれないと思うよ？』

『……それはちょっと遠慮したいな。そもそもばれるだろ？』

『大丈夫じゃない？

ほら、響つて綺麗系のイケメンだし、女に見えなくも無いよ？多分。

『

「仮に女装したとしてもいきなり女装して行つたらなんじゃそらー！？つて話になるだろ？が。」

『女の子でしたつてことにしたら？』

『これ以上嘘で塗り固めたらまた何かややこしい状況になつたから遠慮しておくれ。』

『んもうつーあれもいやーこれもいやじゃ話が進まないでしょ？！』

「・・・もつとまともな案をくれ。」

『ばれたばれたでいいんじゃないの？ その時はその時だよ。』

「・・・。」

『それにてのまま嘘を付いてたといひでいつかどこでバレるのは明白。』

それともずーっと嘘をついたまま友人関係を育もうとしていたの？

「うぐつ・・・それを言われると・・・」

『ばれた時はばれた時に考えれば良いよ！』

『あいこいつ！..』

「・・・面白がってるでしょ？」

『今更なにを。』

「・・・俺、アイシテルのこと嫌い。』

『安心して。私も響の事、好きといひ詫びじゃないから。』

「・・・それが。』

なんか傷ついた響である。

結局『我に妙案ありひー』とこうアイシテルに任せた考へることを放棄した響であった。

泣いて逃げた

「・・・憂鬱だ。」

響はといつと憂鬱真っ盛りである。

なんせ今回はお茶会！

そう、きやつらが来るお茶会なのである。
下手なバイトの面接や会社の企業説明会なんでものよりも緊張する
であろうイベント。

すっぽかせたらと何度も思つたことか。

「本当に大丈夫なんだろうな？」

『大丈夫、大丈夫。私にまかせなさい！』

「アンタだから不安なんだが・・・」

えっへんと胸を張るアイシテル。
胸は無いんだけれども。

実に不安だ。

「ばれたらホント頼むよ。」

『だから分かつてるつてば。まったく女々しいな。』

ほつておけ。

そんな感じのことと言いたそうに顔を顰める響だった。

どうやら俺が一番乗りのようで月村さんと2人きりでお茶を飲む。うむ。平和だ。

平和すぎてつい猫なで声で月村家のぬー」をナーテナーテするのも仕方がない。

なぜなら平和だからだ。

平和ゆえに腑抜けたのであって、日ノろはこんなバカな真似はしない。

それがこの俺。相馬 ひびーーーひかりである。

近くには月村さん付きのメイドとか言うファリンさんとやらが一緒になって話をしているのだが、従者がそんなことでいいのだろうか?

さうに言えば、どうやらデジツ娘に分類されるようで、ここに来て早々服を汚され、脱がされ、入らされ（風呂に）、着せられた。

都合よく男物の服があるわけもなく。

なぜか月村さんのパジャマを着ているところの状況。

結局女装することになってしまった。

いや、女装というほどでもないが。

パジャマなのでスカートというわけでもなく、デフォルメされたネコがプリントされているだけのもの。

外見年齢も相まって女装している感は無い。

知らなければ女の子に見えるのは確かだが、子供の時は男の子も女の子も大して変わらないし、女物の服を子供に着せる親はちらほらいる。今の姿はその程度である。

何が言いたいかといふと、別に女装じゃないんだからねつーーーと書いておきたいのだ。

自分のパジャマを見られることになつて少し恥ずかしがつていた月村さんが可愛かったとは言つて置く。

ちなみにもう1人のメイド長のノエルさんとやらは至つて普通のメイドさんだった。

きっとファリンさんは月村さんのお友達として——の意味合ひが
強いに違いない。

でなければ常識的に考えて、召使の類が主のお客と席を並べてお茶
を飲むなんてこと許されるはずがないからだ。

そして尋ねたい。

なぜにこんなにもネコが多いのかと。

まあ撫でてる分にはなんら問題はないのだが、如何せん、ぬこが可
愛すぎてノックダウンされそうだ。
ネコの多い理由でも考えて氣を紛らわせないことでもしないかぎり、
俺はきっと鼻血を出して氣絶するだらう。
なんてことはなく。

普通に気になった。

「それはね、保健所のとか・・・野良猫なんかを引き取つてゐる
に・・・」

これまた恥ずかしそうにうつむいたのは月村さん。
本当にエエ子や。

もちろんあるがこうした人は少なからず居る。
偽善と呼ぶ人もいるだらうが今回のコレは偽善ではなく完全な善と
言つてもいいんぢや無いだらうか?

見れば分かることであるが、この家のネコはある種、異状だ。
本来、ネコは群れる事を嫌う。

漫画やアニメなどで集会のよつて集まるシーンはあつても現実には
滅多に無い。

犬のように仲良く一つの餌皿で餌を食べるなんて行為もしないのだ。

本を読んで学んだ知識なんだが、この家のネコは非常に珍しい。

よっぽどしつけが良いのか、はたまたそうした協調性を持つてでもここにいたいと思わせるのか。

次に注目すべきは毛並みや健康状態である。

もちろん世の中には野良犬、野良猫や保健所で殺処分される捨てられた犬猫を保護し育てる保護団体や個人の人々がいる。

保護団体はともかく個人の場合は独りよがりな善意であることが多い。

単純な話。

資金が無いのだ。

一般家庭の人がネコや犬を複数飼うとなるとその餌代や予防注射代（国で義務とされる狂犬病など。酷い場合予防注射が一切されず、人間に危険が発生する）だけでも、かなり高額の世話代がかかる。糞尿の処理だつてかなりの手間暇がかかるはずだ。

時には群れに馴染めなかつた個体が虐めで酷い怪我を負うこともあるし、糞を処理しきれずに病気となり死んでしまう場合もある。

そういう人の多くは善意だけ押し付けて、結果的に苦しい生活を近隣住民や救うべき犬猫に強いることとなるわけで。いわばありがた迷惑だ。

口先だけでろくに救えてない、満足に救えてないという状況になる。悪いというわけでもないが誉められた行動でもない。つて、俺みたいなやつが何を偉そうに言つてるんだろうね。

とにかく、ここにネコにはきつちりと管理が行き届いてることが分かるのだ。

糞も見た限りでは見当たらない。

糞はそのままでは肥料とはならず、有毒なアンモニアが発生し、それが草を枯らす。

土中の自浄作用以下の量ならばともかくこれだけいれば確實に分解されない糞が出てくるはず。

しかし、枯れた草が見られないことから田に当たる場所だけ掃除しているということもなさそう。

おそらく専門の世話係を雇いつつも、屋敷に住む人間が一丸となつて世話をしているに違いない。

金持ちだからだろ！と言つヤツもいるだろ？が、逆を言えば金持ちでもない限り下手な救いは中途半端になるだけでやめるべきということ。

そんな惨状を招くくらいなら政治家を目指して、犬猫の投棄を厳しく取り締まる法律を作るべく動いた方がよほど建設的で効率的だろう。

全部本の知識の受け売りだが、本当に彼女はネコを好きなようだ。ただ可愛いだけと侮ることなく、世話に関する手間暇苦労も含めて猫を愛す。

可愛い部分だけを見て、軽い気持ちで飼つてしまふと飼育者にとても飼われる側にとつても非常に不幸になる。

時には保健所に預ける際、「家のネコだけはちゃんと飼い主を見つけてあげよね！」などという身勝手なことを言つて捨てていく人間もいるらしい。

そんな人間が居る中で、彼女は本当のぬーリストと言つていいだろう。

「ど、どうかした？」

「「ううん、なんでもないよ。月村さんは本当に偉いなって。」「えっと・・・そんなことないよ?」

本当に――自分の黒歴史が惨めに思えてきます。

どうしてあんなバカだつたんだろうね。

泣けてくる。

泣きそうになりながらも、じょんじょんを漸く回していくヒップンボーンとインターホンの音が鳴り響いた。

いよいよ来たか。

「じょんまで來たら覚悟を決めよう。

「じょんにちはー。」

「じょんにちは。」

まずは高町さんと――なんだこのイケメン。イケメンか?うん、イケメンだ。あえてもう一度言おう。なんだこのイケメン?イケメンかつ声までイケメン。もといイケメンボイスなんだが。イケメンすきるだらう。

「じょんにちは、すずか、來たわよー。」

次にアリサ・バーニングス。

高町さんの一件でぶん殴られて以来、とっさに逃げたくなつた。までまで、大丈夫ばれないばれない。ばれないばれない。

高町さんがこちらを見てくる。

そら、見覚えの無い人間がいたら気になるよね。

「」んにちは、皆。

・・・ほら。ひかり。言つたでしょ。」

「・・・あ、うん。」

「人見知りを直すためにも自分で自己紹介して。」

「わかつてると、月村さん。」

何度も重ねて言うけど、別に人見知りじゃないんだけどね。君たち以外の人間ならば。

立ち上がって、口を開ける。

「わ、私は相馬 ひかりっていいます。よろしくおねがいします。」

無駄にかしこまつて一人称まで変わってしまった。

月村さんは少し噴出していた。

行儀悪いよ？

「そうま・・・？」

高町さんがなにやら少し嫌そうな顔をした。
ばれたかっ！？

「・・・アンタにお兄さんとかいる？」

何か言いたそうにした高町さんよりもバーングスさんがこちらに問い合わせてきた。

まあ聞かれますよね。

名字同じだもの。

小さい声だけど、「・・・似てるわね。ていうか・・・瓜二つ・・・

双子かしら?」とが言つてゐる。
もちらんのこと。

「こませんよ?」

満面の笑みで応えてやつたぜ!-

ちなみに高町さんのお兄さんがこひらをじりと見ている。

その視線はどこか厳しい。

おい、9歳児に向ける眼光じゃねえだろ。

普通の9歳児だったらいの時点で泣いてるわ。

といふが、まさか気づこいてる? なんてことは……いや、までまで

大丈夫大丈夫。

まだ疑つてゐる段階だらう。多分。

背筋が脂汗でびっちょりになつてきたくらいの沈黙が終わつたあと。

「そうよね……あれみたいなバカがこんな素直なわけないし。
「……そうみたい。よかつた。」

バーニングスさんと高町さんがほつと一息つく。
そこまで警戒されるほどだつたんですね。
俺、泣きそう。だつて男の子だもん!

「……身振り手振りからすると……いや、だが……雰囲気が
あまりにも……つづむ……しかし重心の置き方といい……」

お兄さんはまだ疑つてゐるようである。

ていうか、身振り手振りつてなんじゃそれ?
え、この人どんだけ?

この人と面と向かい合つたのは一度のみ。高町さんの家に謝りに行

く時だけ・・・だつたはず。

ていうか重心の位置とか見て取れるんですね。

何、この人。怖い。格闘技とかやつてるんですか？

いや、それ以前に格闘技やってても重心の位置で人の判別を取らうとする変態はいないと思います。

ていうか、こいつは俺とはまた別のベクトルで変態では？と思え始めた。

ちょっととした振る舞いでバレかねん雰囲気がある。

只者じゃないつーと思ったね、ぼかあ。

さらりに問題が積み重なった。

「あ、いらっしゃい。ちー君。」

ちー君とか親しげに相性で呼ばれた男はこいつがやの山田君（仮称）。
美少女に相性で呼ばれるとは羨ましい。
というか下手したら既にフラグを作っているのではないだろうか？
妬ましい。死ねばいいのに。
とこりうか殺してしまおうか？

「・・・どう思つ、アイシテル？」

『バカ言つてないで、氣をつけないとーーほら、彼は転生者だから・・・』

「・・・原作にいない・・・その顔・・・おまえつー？

性懲りも無くまた来たのかつー？』

「や、やべつー？」

「これは非常にまずいつー！』

「えっと・・・なんのことだか？」

「ああつ！？」

馬鹿やううつ・・・てめえは居ないはずの人間だうがつ・・・なんでここにいるつ・・・

またなのはにセクハラする気かよつ！？」この厨二野郎がつ・・・変装までしゃがつて・・・俺は騙されねーからなつ！！」

「ち、ちが・・・」

やばばばばばばつ！――

やばす！――

これは不味いつ！――

正義感溢れる山田君にしては端から敵対心MAXモードであるが、それが正しい。

あれだけ迷惑かけて彼の友達にセクハラしたのだから、むしろこれくらいが当然だろう。

何も聞かず追い出されても文句は言えないくらいの酷いことだつたわけなのだし。

お兄さんは山田君ほど敵対視しては居ないようだが（それはそうだ。仮にも子供なのだから）、いつでも高町さんの間に入れるようにさりげなく間に入っていた。

そのさりげなさがなぜか異様にぐさつと来ました。

周りの視線はまさかつ！？って感じである。

月村さんに至つてはその顔に凄まじいまでのガッカリ感 といえ巴若干コメディ臭いが、10年来の恋人に突如「別れよつ。実は俺・・・女だつたんだ。」と言われた様な顔をしていた。

いや、そんな顔見たこと無いからこの例えが正しいのかは分からないが何はともあれ、こんな時こそ困った時のアイシテル頼み。

さあ、存分に思いつきりやつちやつて下さいよ！――

アイシテルの姉御つ！――

『合点承知つ！！』

そしてアイシテルがやつたことと言えば。

「ハアーハアツハアツハアツ！」

そいへは俺の偽者たゞ！！！本物はこの俺！！！

さきなり田村家に突如出現した謎の厨房。

その正体は俺の昔のアレだった

よつて俺はつい反射的にぶん殴った。それこそ殺す勢いで。あらん限りの力をこめて。

「一九五〇！？」

強く力なりれか

そのままズンと倒れこむ厨房。

たせこれを見た

多く同じ人間が2人いるはすらないということで考え方などは
違うが。タイミングと出現場所が意味不明すぎた。

ほら、月村さんなんか倒れこんで・・・倒れこんで

卷之三

何より倒れ間際の厨房の言葉。

なぜ俺の名を言つてしまつたのか。

『響も“昔の俺”とか言ひやがつてゐよ?』

そうだったな・・・終わった。

何もかも終わつた

かとかすかすかしいのはなせたゞ
やつ、きつと二れま。

友達を騙すことに引け目を感じていた良心の痛みが無くなつたからだ。

それと同時に唯一の友達も無くなってしまったがな。

「…アーティストの本質を知るための研究が目的でござる」

俺は泣きながら月村家を後にした。

アイシテルには頼らないことを決めた記念すべき日でもある。

響はと畜'つとがむしゃりに走り逃げた。

結果。

いまだ円村家の庭に居た。

「どうちが出口? こうか向の森林?」

なんせ円村家は広い。

広すぎるくらいに広い。

森が広がっているのだ。

正直何のためにと思わせるほどに敷地が広い。

さすがにもう一度戻つて帰り道を聞くところとも出来ず。のんびり歩いて出口を探す始末。

空を飛ぼうと考えては見たものの、田撃たれる可能性を考慮すると最後の手段としたほうが無難だろ。

「そつこえはあの厨房はどうした?」

『消したよ?』

「そう、良かった。あれがそのまま残つてたら、また下手なこと言うだらう? こ・・・は?」

響とアイシテルが話していると前方にありえないくらい大きなにやんこが出現した。

にやーんと若干のHマーがかかりつつもにやんじはのんびり林を探索しているようだ。

「・・・円村さんは本当に凄いな。 あんなネコまで飼つてるとか。

餌代とか糞の処理とかが大変そつだ。』

『・・・違うよ、あればジユエルシードを取り込んだネコつてところでしょう。』

「またそれが。じゅえるしードとやらか。まったくビリビリでも落ちてるもんなんだな。ていうかさ、あそこそこここの高町さんじやない?』

『わうだね。どうする?助けるの?』

大きなにゃんこの前には高町さんがいつの間にか来ていた。助けるとアイシテルに聞かれて、響は唸る。

「いや・・・別にいらないでしょ。彼女は天才?らしいじゃん。俺が会ったあれよりも危険は少ないみたいだし、そもそも俺が何をどうして手助けをしようと?」

『変わりに封印をしてあげるとかどうだ?』
それでジユエルシードを持つて、それをプレゼント代わりに渡せばあの時のお詫びになるんじゃないかな?』

「・・・なるほど、その発想は無かつた。それならそつと、俺もじゅえるしードとやらを探してれば良かつたんじゃない!?それで仲直り・・・は無理でも、少なくとももう完全に気にしない、というレベルにはなつて欲しい・・・とこう願望を語つてみたが。どうなんだろうか?』

『試す価値はあると思つよ?』

「・・・本当だ?』

『えーっと・・・ですが泣くとは思わなくてね?その・・・反省します。』

アイシテルが語つてるのは田村家の出来事だらけ。

『なのはちゃん経緯で、田村さんの印象も回復できるかもよ?』

「よし、なりばやひついーーー。」

『ヤヒで即答なのね。』

当然である。

響にとつての今生の友達。それが月村すずかなのだから。そして比較的寂しがりやの響としては望むところである。

せりにやる『』をアップさせているのは相手が強そうでないところもある。

「・・・だけど登場はどうすればいい?」

『え?』

高町さんは響に対して少なくとも好感情は抱いて無いだろ?。いきなり出たところで無駄な警戒を持たせるだけという可能性もある。

下手をすれば攻撃されかねない。

そもそもこのまま置いておいてもなんら問題はないだろ?。原作を知らない響とて、彼女が主人公らしきことは分かつていて。主人公ならば手に入れて当然。さらにとなりにはなんらかのチートを持つていると思われる山田君もいるのだ。

まず間違いなく、手に入れることが出来るだろ?。

『なのはちゃんは優しいから・・・多分大丈夫じゃないかなあ・・・それともこにはなのはちゃんに任せて、他のジュエルシードを探す?』

「よし、やつしよつーーー。」

『これまた即答ね・・・ん?』

そんな感じのことを考へてみると、またもや新たな人間がやつてき

たようである。

いつぞやの「スプレ金髪少女。

フロイト。

「・・・こまだ鎌を持つてゐるんだな。」

『ビリする。』

「どうもせんつてば。とにかく俺達は別のジユホールシードを探すま
――なつ！？」

フェイトはネコに攻撃を加え始めた。
それを見てなのはも少女の存在に気づく。

「なつ！？」に攻撃だとつ！？

許せんッ！今度こそヤツを説教して貰れるッ――！」

『・・・やめといた方が・・・』

「こや。だめだつ！――あのなこせ、じゅえるし――どひの被害者
だひつ！？」

無駄に痛い田てあわせる必要は無いつ――。」

と響が話している間にも攻撃されるな。

その際、なのはなのはで変身中。

どうのいつの言つ前にさつと行動を起しつづべきだ。

「いかんつ！？」

こひしてゐ間にもあのなこがつ！――

アイシテル行くぞつ！――

せ、せせ・・・せつとあつ。ふ。

『相変らず小声ね。』

響の体が光り、月村さんのパジャマが解けるようにな消え、西洋鏡の

よつな甲冑が身を包む。

腰には飾りの少ない両刃のロングソードがささり、フルフェイスの兜が顔を覆い、伸びた髪が若干兜の後ろからほみ出す。

籠手のそれに一対のナイフが収納される。

変身完了である。

「セレの鎌の少女、ぬこを攻撃するとせびりこひだつーーー。」

響が躍り出る。

「・・・誰？

貴方もジユエルシードを集めてるの？」

「集めてない。いや・・・せつを集めることとしたけど今回の用件はそれでなくてだな。」

「・・・あいつつー？

おー、響だりつーおまえつーーー。」

「つー？」

なのははようやく変身が終わつたよう。

そして後から来たのだろう、山田君。

山田君は西洋鎧に包まれてこるのも関わらずに響の正体を看破する。

おそれく感知系の魔法を使つているか、そつこつたチートを貰つているのだろう。

デバイスを持つてないことから、肉体的なチートや特殊能力的なチートを貰つたのだと思われる。

「・・・」などとついで叫んでいたとは・・・オマエ・・・まさかつ

「！？」

「・・・。」

響はどうするか迷っていた。

勝手に山田君が叫んでいるだけならば今は誤魔化せるんじゃないかなあととか思いつつ。

なのはが怪訝な顔を浮かべているがそれよりも大事なのはこいつである。

響はフェイトに向き直す。

「どうしてネコを攻撃するんだ？」

可哀想だろう。君の腕ならばそのまま封印するのも可能なはずだ。必要なく痛めつけるのは感心しない。」

「・・・こうした方が手っ取り早い。」

『確かにね。弱らせてからの方が封印の難易度や必要な魔力量は下がる。手っ取り早いのは間違いないわ。』

「・・・なるほど。高町さんがいるからか。」

『そのとおりね。』

響は考えた。

さて、どうしよう?と。

響は知らぬことであるが、物語的にはネコのジュエルシードを回収するのは田の前の少女である。

山田君は下手に手を出すつもりはない、非介入派。下手に話をこじらせたらエンドティングが変わると考えているため、山田君は手を出すつもりは無い。

この結末に変更は無かつたはずだつた。しかし。

しかし、響としてはきっと高町さんが手に入れるのだからと考えている。

これが一つ田の勘違いを発生させた。よつてこのやつなことを言へ。

「君に手に入れることは出来ない。
さつさと去つた方がお互いのためだ。」

「・・・関係ない。私は手に入れなければならないのだから。例え
2人が相手でも！！」

次に問題なのがここで山田君の最悪の勘違いが発動したからだ。

「・・・なのはつ！！

あいつにジュエルシードを渡すなっ！！

きつとあいつはジュエルシードをお前達を惚れさせるために使う氣
だつ！！」

響は内心なんですとおおおおおおおおおつ！？

と自分のことを言われてるはずなのに、自分が一番驚いた。

山田君は響が泣きながら帰つたところを見て、「あいつもいい加減、
気づいたのか？」と考えている。

しかし、こうした勘違い系、もしくは自意識過剰系のチート人間が
そう簡単に心変わりするはずないとも考えている。

彼の趣味はインターネット上の魔法少女リリカルなのはの一次を
ひたすら読むことだつたため、そうしたところから先入観が生まれ
ていた。

改心するはずが無いという。

その結果、この誤解に響いたのだが。

「まさかっ！？」

確かにジュエルシードには願望器としての能力があるけど・・・
「なぜそんな思考に・・・」

ユーノが戦慄した様子で語る。
響も戦慄した様子で語る。

アイシテルは不謹慎だが、笑いを堪えていた。

もちろん響は響で間違いを正そうと声を上げようとしたが、そこで
鎌を構えた（ギヤグではない）フェイトが切りかかってくる。

慌てて剣で受ける響。

お互いの武器がぶつかり合つ、鋭い擦過音が鳴り響く。

「・・・そんなことのためにジュエルシードは渡せない。」

「いや、ちがつ！？ がはあつ！？」

「つー？」

今度は背後から砲撃がぶち当たる。

なのはのブレイクシユートだつた。

フェイトは戦いに慣れているため、常に他の一人も視界に入れてい
た。よつて避けられたが、響は実戦は実質初めて。気配とか魔力で背
後の攻撃を察知するなんていう高等テクニックが可能なはずもなく。
きりもみしながら数百メートル吹き飛ばされる。

「・・・どうしてそんな酷いことを考えられるの？」

そんなことで好きになられたつて嬉しくないと思う。考え方直してよ。
すずかちゃんがやたらといい人だつて言うから・・・どんな人だと
思つてみれば・・・酷いよ。」

酷いのは背後からためらいもなく打ち抜く貴方じゃないだろうか？
と言いたかつたが、響は苦悶の表情を浮かべるだけ。
予想以上にイタイ。
身も心も。

『非殺傷設定をオンにしてないみたい。

そこまで使えないのか・・・それとも少し痛い目にあわせたいのか・

・』

「前者である」とを願うわ・・・本当。」

『つー?』

後方つー! 気をつけてつー!』

「また後ろかいつー?
ぐがあつー?」

またもやきりもみしつつ吹き飛ぶ響。

地面に墜落し、バウンドしながら土にまみれる。

「・・・あいつ。」

『あれは・・・NARUTOの万華鏡写輪眼ね。
この世界はあくまでも魔法少女リリカルなのは。万華鏡を魔力で再現してゐに過ぎないのでしょうけど・・・それでも脅威よ。』

「・・・厨一だな。」

山田君は田を異様な紋様に変えつつ体につつすらと紅いオーラを纏つてゐる。

NARUTOという漫画にて体を覆うように展開する人型のオーラ、
スサノオである。その剣のなぎ払いを受けたのだろう。
切れなかつたのはそれだけ鎧が頑丈だということ。響としてはほつと胸を撫で下ろす。

右には。

左に山田君。

後方にフェイント。

なぜこんな状況になつたのだろう?

響は泣きそうになりながらもこれもまた自分の昔のアレが原因かと思いつつ。ため息を吐きながらここから逃げることを考える。
自業自得とはいえ、これは酷すぎる気がしないこともない。

「これが乙女を傷つけた罪か。

『逃げるの?』

「・・・逃げやがれひつじよと?』

響は逃げた。

ボウられて酷すきて

「逃がすわけ無いだろ？　いい加減にしてくれ。」

「つー？」

背後に瞬身の術で回った山田君のスサノオによる一撃。

剣で受けけるが剣はいつもたやすく折れ、地面に呑きつけられる。

「いつつだああああつー？」

『私を使いなさいー！』

『いいつー・本気で殺す気よつー！』

「殺すつもりはないつーの。だけど、殺す一步手前までは・・・
ね。」

「だから誤解だと・・・」

「演技は必要ない。」

響はため息をはぐ。

演技だつたらどれほど良いか。

「なのは達を謀つた罪。さすがの俺も怒髪、天を突くつて感じなんだわ。」

「・・・そいつは結構なことで。」

「いつちやあなんだが、いい加減にしないと殺すことも考えている。」

「貴方・・・ためらいが無いと思つたら・・・人を殺したことがあるのね。』

「・・・んまあな。この世界でなのは達にかかる理由は無かつたし。』の力で簡単に就職を。とか思つて、管理局勤めだつたわけだが・・・まつたく。なのは達が危なっかしくて見てられないから・・

・ついに。」

なんだかんだで巻き込まれる。

響はこんな時だが、こいつ、オリヌシ臭いと思った。

そして同時になんて羨ましいんだと思った。

望んでないならその立場を分けて欲しいくらいだ。

「・・・内臓をぶちまけて死ねばいいのに。」

「・・・一応言っておくが、なんだかんだで俺はなのは達が好きだ。オマエの思い通りにはさせないからな。」

「・・・もうそれでいいです。」

響はシユーターを展開。

放つ。

が、それらは全てスサノオに阻まれる。

「ふん。勘違い系主人公ってのは本当に迷惑なものだな。」「・・・。まつことその通りだと現在進行形で実感してる。

カートリッジロードつ！！

・・・降りかかる災厄を

わが身に宿し

全てを屠る天上の剣・・・

『加減は不要つ！ぶつ殺すつもりでやつちやえーつ！』

響の周りに黒い魔力が集まる。

巨大な魔法陣が展開され、魔力が収束されていく。

「ディザスター・ブレイカー！！」

巨大な黒い奔流が山田君を包み込む。

「ちつ！天照つ！！」

それが黒い炎で焼き死べくされた。

「なつ！？」

「・・・ふつ。やつぱり天照は魔力消費量が激しいな。ま、それはともかく。

・・・俺としては今回のPT事件もハッピーエンドにしたいと考えている。

そのためのチートも用意してある。転生時にな。

アリシアテスラロッサを生き返らすため。

本来ならこつそりと助けるだけのつもりだったのに。

「・・・」

響は言つてゐる意味が理解できなかつた。

当然である。原作を知らないのだから。

それよりも目の前にこいつにボロられたくない。

それが思考の大半だ。誤解で痛い目に遭うとか。

いや過ぎる。

つかこつそりと助けるとか。

後でばれて主人公組みの好感度が「言つてくれれば良かつたのに・・

・まつたくちー君つたら。」みたいな好感度アップフラグですね。わかります。

ますますオリ主くさいと思つた。

「どうせハーレムを！とか思つてゐるんだろ？俺からしたら下りん。

いい加減なのはを困らせるのはやめろ。

オマエを見るたび泣きそつた顔を見るのは辛い。」

「・・・」

響も辛いです。

現状がもちろんのこと、そこまでのものだったとは思わず。

「それと『バイスも没収だ。よこせ。』『バイスを渡すなら勘弁してやるわ。』
「・・・。」

響は考えた。

響にとつてなんだかんだ言つてもアイシテルは良き相棒である。なのはとの一件で落ち込んだ響を励ましてくれたのは母親の文香とアイシテルだし、なんだかんだで嫌つては居ない。

そして響としては可憐な美少女の喪失は世界の喪失と同義。彼女たちに関わらずしてどうやって将来の嫁を探すことが出来るのか。

もちろん昔はハーレムを目指していた部分もある。が、今となってはただただ彼女が欲しい。嫁が欲しい。

それだけである。

別にその辺の女の子でもいいのだが、響としてはやはり原作組みの女の子とお近づきになりたい。

その辺の女の子でいいなら別に前世にもいた。

しかし特別優しい女の子。

原作組みはそれが顯著だ。

だからこそ彼女たちを嫁にしたかったといつにこの状況。なぜ敵対してるのだろうか？

とりあえず出した答えは、逃げ出すということ。やたらと敵意を向けてくる彼を見て、難易度が上がったなあとか思つていてるが、それ以外の選択肢は不思議と思い浮かばなかつた。

いや、思い浮かぶはずも無いのだが。

ここで返り討ちにしたとしても悪者だし、ここで負けて痛い目を見るのも嫌だ。

殺す一步手前とか。

味わったことは無いが、死ぬほどなのに死ねない痛み・・・みたいな感じだろう。

そのためにはここを呑き潰さないといけないらしい。

なにはともあれアイシテルを渡すつもりは無い。

彼女はデバイスとかいう道具ではなく、唯一の友達なのだ。

「やるんだな？」

「・・・せっかく見逃してやるつってんのに。オマエみたいな馬鹿はなまじ力を持つから粹がる。デバイスは確実に奪わせてもらつぞ。」

「一応、俺がこの世界にきたのはハーレムを作りに来たわけだからね。そのハーレムを妨害するというなら黙つてられないな。」

挑発をする響。

誤解でボコられそうになつている彼としてはこれくらいは言って当然。

むしろ相手を直接的に侮蔑しないだけ、響のビビり具合が見て取れる。

しかしその内容はさらに誤解を深めるだけである。が、どのみち解ける様子が無い以上、意味の無いことだらう。

『・・・馬鹿だけどそんな響が私は好きだよ。』

「ほんとに下らないヤツだな。あきれた。」

山田君が身構えると同時にスサノオも身構える。

そのまま少しきり結び、時間がかかると思ったのか山田君は距離を

取る。

「オマエは絶対に勝てないよ。
俺にはNARUTOに登場した術や技、特殊能力を使えるチートがある。こんなことも出来るんだ。」

山田君の体から魔力が吹き出る。

「紅い化け物？」

山田君の全身の皮膚が捲れ飛び、真っ赤となる。そして尾が6本生えていく。さらには周りには骨のようなものまで浮き上がっていた。

「九尾の六本形態。知ってるか？」

「つー？
ぐはあつー？」

踏み込みと同時に衝撃を感じる。

そのまま、きりもみしながら吹き飛ぶ。

『良くくきつもみする田ね。』

『んなこと言つてゐる場合ぢやないつー！』

『フォルムチェンジ
アイシテル、形態変更ー！』

『了解ー！』

鎧が霧散し、服が展開する。

その服はヒラツとしてまさに近接戦をする魔法使いといつ感じである。

標準装備から高速戦闘用に切り替えた形態である。

「ブリッジモード展開！！！」

『またまた了解！！』

ブリッジモードは高速機動戦闘用の形態である。

アイシテルのフォームチョンジはフェイドやなのはのようにデバイスではなく術者のバリアジャケットの変更を行い、一種のバトルフォームをとる。

先ほどまでの防御型兼汎用型。

今の鎧を剥いだ攻撃型兼速度型。

響の体から黒い魔力が迸る。

響の魔力ランクはS⁺。

たまたま膨大な魔力を内包して生まれたのは単純な幸運^{ラッキー}である。

「じつ！」

またもや超速接近してきた山田君をひらりとかわして、ナイフを叩き込んだ。

「カートリッジモード！！」

クロスブレイドシード！！」

厨二くわこが前はなのはの世界なりではある。

ナイフによる双刃が叩き込まれ、山田君が地面に叩きつけられるがすぐに体制を建て直し、周りの魔力すらも集め、山田君が砲撃を放つ。

「尾獣玉つ！！！」

「当たるかつ！！！」

「六！」

「つ！？」

響を狙つた砲弾はなのはと戦うフェイトへ向かう。

- 151 -

卷之二

山田君は間に会わす
響か急いで間に入る

『アイシテルッ！！』

カートリッジロードッ!!

ミリヤノガノノミツ

瞬時に万を越えると思わせるほどの剣閃が山田君の砲弾に飛来する。そして爆発。

余波を受けたアユイトは吹き飛び、なのはも吹き飛ぶ。

防御する。

しかしその頭上に影がかかる。

「一應礼は言つておく。助かった。が、慈悲はかけん。」

- 1 -

下手をすればなのはも巻き込んでいたのにも関わらず、その動搖

を押し隠し、すぐに戦いの組み立てを行う。

失敗したからといってそれにいちいちショックを受けていたら、き

りが無い。

割り切ることの出来る人間。

アイシテルは警戒を高め、響のサポートをする。

『戦りなれてるのねつ！－！

プロテクショントー！－！

『無黙つ！－！』

さうに尾獣玉を放つ山田君。

直撃を受けて墜ちる響。

「があああああつ－？」

『きやあああああああつ－？』

土の柱を作る。

そして降り立つ山田君。

なのはは少し恐怖を交えた表情で山田君を見た。

「・・・ちつ。調子に乗りすぎたな。」

とぼやく声は小さく誰にも聞こえない。

「ちー君？」

「ああ、そうだよ。なのは。俺が怖いかい？」

全身紅い姿。

田は丸く向き出て怪しく光り、6本の尾は次の獲物はまだかとでも言つよつてうめこっている。

しかしその田は距離を開けられる」とに対する恐れを内包していた。

なのはは首を振る。

「ううん、そんなことはないよ。ちー君だから。」

「・・・ありがと。」

軽いラブコメもどきを繰り広げている山田君に爆発して死に腐れと言いたくなつた響であるがそんなことを言つのも辛いほどの一撃を受けた。

「・・・ちー君、それはやり過ぎじゃ・・・」

なのはが血まみれの響を見て言つ。

「ああ。分かつてゐる。申し訳ない」としたよ。加減が難しかったとはいえ、やり過ぎた。

今治す。・・・さつきの借りがある。今回は見逃す。一度と余計なことはするな。」

山田君のチートによる医療忍術で傷が癒える響。

ここで反撃をしたとしても完全な悪者だ。

結局ボロられることになつた響である。

ちなみにさつきの砲撃はフェイントに直撃したとしても問題は無かつた。

山田君の魔法は敵対者以外は極端にダメージを減らすというチートを貰つている。

強大な力を願うだけではなく、それによる周りの被害も考えている山田君。つくづく良い人感が出てる。

今更であるが山田君のチートは魔力によるNARUTOの世界の忍術の再現と魔力ランクSSS+。

さらに味方に対するダメージ緩和効果といつも都合能力。この二つ

である。

「・・・。」

響はなんだかどひども奥くなり、なのはの警戒の入り混じった視線を背に受けて泣きそうになつたがそれを押しとめる。

「・・・。」

もう印象の回復は望めないだろ？

「・・・。」

よつて、響は何も言わずに立ち去る。
響の田標がここで変わる。

せつかくのおっぱいチート。

せつかくのイケメンチート。

せつかくのテバイスチート。

全て嫁を——あわよくばハーレムを作ることを念頭にしたチート

であった。

目の前の男にぶつけにした。

「いづれ貴様の胸を必ず揉んでやるからな。」

意味不明な捨て台詞を残して去り——響。

シリアルスなのに、正直失笑物である。

あまりの意味不明さに山田君は首を傾げ、なのはは身を縮こまらせた。

あの一件を思い出したのだ。

響は再度内心で憤慨しつつ、高町さんをびびらせたかつたんじゃないのにと考えながら空を舞う。

ちなみになぜ操むと言つたのか。

響のおっぱいチートは自在に胸を操る。胸を出現させ、男にとつての最高の嫌がりをしてもやれりとしたのだが、もしかするとこれがはじも無く。

その間、フロイトはちやつかりジュエルシードを回収。響と山田君の魔力や技術を鑑みて、一番効率のいい方法を取つていた。

アイシテル、愛してゐ

「…………はあ。」
ため息が出る。
それもそのはず。
響は憂鬱である。

「…………どうする?」
「…………何が?」
『もう彼女たちに関わらなくて良いんじゃない?』
「…………ですよね。」
『氣分転換に温泉にでも行く?』
「…………そうですねー。」
『そんな泣かないでよ。』
「…………」
『黙らないでよ。』
「俺、何しに来たのだろうか?」
『誤解したり誤解されたり、ふんだりけつたりだもんね。』
正直面目 いから私的にはいいんだけどさ。』
『そこは一応でも本音を隠すところだよな?』
・・・まあいいけどわ。事実滑稽なことになつてゐには違ひない。・
・・・ぐす。』
『それより田村さんのパジャマをまつてびびつたの?』
『どうせやつて返さうかと思つて。』
『それを口実に謝るとか?』
『うん・・・・まあ。』
『止めといたが?』
あれだけショックイングなことになつてゐる上に響の前の性格からくる

と、近づくためのキャラを演じた・・・と想われると思つよ。
それに田村家ならパジャマの「せー」つ、すぐに買ひ直してゐると思つよ。

う。』

「シヨウキングな方は100パーセント貴方のせいですけどねーー。』

『ちょっと盤場のさせ方に凝つただけじゃないの。』

「それが今の状況を招くキッカケになつたと思ひよ、俺。・・・遅かれ早かれれることになつてたと思つけど・・・」

『過ぎたことをぐちぐち言わない！』

・・・私だつてさすがにふざけすぎたつて反省してゐからーー。』

「・・・はあ。温泉。行こうか。』

『よしよし。それでいいのだよ。』

「・・・。』

いつもして響達は温泉に行くこととなる。

またもや彼女達と会つとこつ事も知らす。』

母親の文香と温泉旅行に来た響。

早速、こそこそ隠れることになつた。

「母さん、ちよつと商店でお菓子買つてきて良いー？』

「あら？おなか減つたの？』

「うん。』

「あまり沢山買つたらダメよ。晩御飯が食べなくなるからね？』

「分かつてゐよ。』

とこつやつ取りの後、さつそく商店に来た響。だつたのだが。
そこにはきやつきやつうふふと楽しそうにほしゃぐなのは達。

「・・・狙つたと言つわけでは無いだろうな?」

『ノン!と應えておくわ。私もちょっとびっくり。』

「ていうかオマエは原作知らんのか?」

『・・・んー私つてほら。快樂主義者?』

じやちょっと意味が違うかな?』

面白いいかどうかが第一だから、先に結末知つてたらつまらないですよ?』

というわけで特に聞いてません。』

「・・・使えないな。」

『響もね。』

「俺も使えないな。」

『分かつたみたいで何より。』

『フォローしてくれ。・・・パジャマを返すべきだらうが?』

『またそれかい。てか持つてきたの?』

「・・・一応、なんか持つてると安心して。」

『傍目から見ると変態よね。少女のパジャマを持ち歩く男・・・キモ。』

「・・・ひむさい。自覚はしてるが、いまだ未練たらたらなんだ。もってたらなんか月村さんが“頑張つて!響なら出来るよー”といつてくれる気がする。」

『ちょっと様子見ていく?』

「・・・スルーか。」

『幻聴乙。惨め過ぎて『バイスの私も涙が流せるレベル。流して見せる。』

『比喩表現だバカヤロー!』のやうー。』

「・・・分かつとるわ。」

『ほら、アホなこと言つてると見失うぞ。』

「・・・うん。』

響もアホらしくなったのか、アイシテルとの会話を切り上げて付けていく。

ちなみに憎^{へへ}きあの男。

山田君もいるではないか。

こつそり^{トスリ}ディザスター[・]ブレイカーで打ち抜いてやるつかと思ったのだが、さすがに人の目がありすぎるしそんなことしたら殺されるかもしね。

うん。不意打ちは良くないよね。

ビビりの響は怖^へ氣^きづいた。

「あいつら早速温泉に入るみたいだな。」

『そうみたい。 ていうか、こいつして見ると山田君、モテてるね。』

「・・・。」

『爪。痛くないの?』

「・・・え?」

おわつ!?

いだあだだだあああああつ!?

あまりの憎しみでつい壁に爪を立てていたせいか爪がはがれかけていた。血も出ている。

こんな時に便利なのがおっぱいチートである。

胸を揉むことで体の傷含めてリフレッシュ!

・・・自分で自分の胸を揉むと言う残念な絵柄に對しては突っ込んではいけない。

おっぱいチートには三段階のレベルが存在し、第一が單に胸を弄る(もとい体の形態変化)、第二が胸を介しての治癒。これは第三が時の逆行による不老化。(原理的には第一も一緒に時の逆行による治癒だつたりする。)

若返らせたりも可能。その逆もまた可能。

強力なチートである。が、からず胸を揉まなければならず、ソレ

相応の魔力を消費する。

不老化を使う場合、魔力によって効果年数が決まる。響の全魔力を込めても約1年しか効果が持たないという微妙に残念仕様である。

「ふと思いついたんだが・・・」

『何?』

「このチートで成長、もしくは若返りをすれば問題ないんじゃないだろ? うか?」

『でも、山田君にはばれると思つよ?』

『うなれば無駄に手の内をわらすだけになる。』

『また山田君か?』

『つぐづぐ邪魔者だな! ! あいつはつ! !』

『でも・・・おっぱいチートの第一段階を応用すればバレナイかも。』

『なんだと! ?』

『あれ、胸を弄るってのは結局のところ体の形態を弄るってことだから・・・女になつたり、全く別の生物になつたりが可能だと思う。それこそ昆虫にだつてなれるはず。』

『なつ! ?』

『そ、そんな便利機能がつ! ?』

『でも・・・胸や手が無い生物に変身しちゃうと戻れなくなるから気をつけて。多分、一度なつちゃうとどんな手を使っても戻れない。神様印の能力だし。』

『なつ! ?』

『そ、そんな恐ろし機能がつ! ?』

『私も詳しく述べ知らないけど・・・胸を揉むチートだから揉める様な胸が存在し、なつかつ胸を揉める様な手があり、胸に手が届く動物・・・ネコや猿とかそんなところかな。・・・ま、おっぱいチートの“おっぱい”が人間のみなのか動物もありなのかまでは分からぬけど。』

ג הגדה?

ならばネコに・・・でも最後の一言が怖いのでやめとく。」

ノリタケ

「やかましいつー！」

『じゃあ女体化いつとく?』

「酒を誘うノリで女体化を勧めるなっーー！」

もういいよ。お菓子買ってどうとどうる。

もういいの？

「あの件で何か気落ちしてたかな」とか思つてたんだが、別にどうも感じてないみたいだから、良一。

『黒い理由』

「……言つた。俺が一番悲しい。数日で忘れ去れるほどのショック

クだつたつてことだわい。」

『ショックを受け続けても、いかにしては申し訳ないけど、もう少

しなんか影があつて欲しかつたつて感じ?』

「・・・」
「ニサニナガル」

『多分、山田君が慰めたとかじゃないの?』

「・・・死ねばいいのに。」

『はいはい。どんな響でも私だけはついてるからね。安心しなさい。

1

『響、
何處で隠すのですか?』

介入しないならしないでとつとと去つておいたほうが無難よ。』

「好きだああああああつーー！」

オマエに惚れたぞっ！！アイシテルウウウウウウウウウウウウウウ

۱۱۰

睡夜がつくから私にキスするなああああああつ――

その後、ジュエルシードの反応があつたが、再度皆から敵対されるのは目に見えていたので響は何もせず温泉を楽しんだのであった。

「あいつ……何しに来てたんだ？」

・・・不気味なヤツだな。

何気に感知技で響に気づいていた山田君。

「こちらをじれじれ介入したそうに見ていたくせに何もしなかった」とのことで何か企んでいるに違いない、と山田君により警戒されるのは言うまでも無いことだろう。

こゝにしてさふは説解は深まるであつた
誤解が深まっていくのは最早彼の天命であるのかもしけない。

アイシテル、愛してゐ（後書き）

「ひひりで誰もがわかつたと思いますけど、アイシテルの名前は「愛してゐ」のカタカナ表示です。

もともとは愛してると打ち込んだのが、アイシテルとカタカナ変換され、それを見て「これ良い名前じゃないつー？」とティンと来たのが始まり。

さらにはそのアイシテルの名前からこの物語の大筋もティンと来ました。

え？ 変な名前？

H A H A H A H A

このセンスを理解できない無いなんて、ちょっと頭おかーーーげふんげふん。

冗談です。

さらに言つと物語の大筋が出来るのと同時にちゃんととした理由付けもティンと来てるんですよ。

それはまあ見ていればなんとなく分かるかと。

この作品のメインテーマでもあります。

え？ 原作ヒロインとのラブラブはテーマじゃないのつー？ つて？

大丈夫。ラブコメは僕の生き甲斐ッスから。

それだけははずさねえつー！

初めてのミッドチルダ

響はと言つと。

管理外世界のミッドチルダへと来ていた。

『え？

なんで？』

「今更過ぎる疑問だな。アイシテル。」

『うん・・・まあ。』

「ふふふ。どうして？」

「うつ思つたことだらう。」

『・・・うん、まあ。』

「せひ、聞いてじらん？」

「じつしてこんなとこに来たの？ うて。

かもーん。りつすんみー。」

『「つやキモいつてこいつのを言つのかな？』

「そんなことを聞けとはいつとらうつーー！」

『・・・はいはい。で、どうしてミッドチルダにまで来たの？

地球、ほつといてよかつたの？』

「ふふふ、良くぞ聞いてくれた。」

『聞けつて言づから・・・面倒くさこな、もひ。』

「簡単な話だ。」

俺のことを誤解しまくるバカドモなど知つたことかっーー！

『うつ真理にたどり着いたのだーー！』

『・・・それで？』

『は？』

『オチは？』

『いや・・・あの・・・』

『オチは無いの？』

「えと・・・その・・・あれだよアレ。」

『無いのね。つまらない男は嫌われ——』

「いや、待てっ！――

それで俺は気づいたんだよっ！――

『何に？』

アイシテルはもちろんオチなどないことは気づいている。

理由もきっとなんとなく前々からアイシテルに聞かされ、興味が深かつた魔法の世界というものの典型。ミッドチルダ。ここに来てみたかったとかそんなところだらう。

端的に言うなら響をちょっと苛めて楽しんでいたのである。

余裕綽綽である。

しかし、次の響の一言で爆弾を投下された。

「アイシテルを人型にするのだっ！――」

『え、？』

「俺はアイシテルが好きだ。

前回の一件でアイシテル以上の女はいないと気づいた。

なればこそ――

おっぱいを揉んだりしたいっ！――

え、えええ、えっちなことかもしたいっ！――

だが、残念ながら、アイシテルはデバイスだっ！――

おっぱいも無ければ股間もない。

さらに言えば、むちつとした足も手を繋ぐための手も無い！――

その可憐な笑顔であるう顔を見る術もない！――

だからこそ・・・そうだからこそっ！――

俺はアイシテルの改造方法を知るため、ミッドチルダの無限書庫とやらに行こうと思ったのであるっ！――

『ふええええええええっ！？』

「驚いてる声も良いつ！――

ああ、これに表情が付けば、その笑顔や驚く顔で俺は昇天してしまった。「うだうだうつーーー！」

『ば、ばか言つてーーー』

「俺は結構本気だつーーー」

『・・・ま、また好きとか言つて・・・その、私テバイスだよ?』

『問題ない。仮に人型になれなくともなつーーー』

『私・・・人型になつても子は残せないと思つよ?』

『ふつ！』

愚問だな。

それもまた問題は無い。些細な問題だ。『

『からかつてゐる?』

『ふざけて愛の告白をするほど落ちびれたつもりも無いーーー』

『・・・・』

『アイシテル?』

『・・・別に。勝手にすればいいじゃない。』

『えーっと・・・告白の答えとかは頂けないんでしょうか?』

『いや。』

『え?』

『イヤだつて言つてるの。』

『な?』

響が泣きそうになる。

『情けないし、ビビリだし、逃げ腰だし、誤解されやすいし、アホだし、馬鹿だし、少しナルシ入つてるし、イケメンといつても見た目だけだし、魔法の腕も下手だし、戦闘も弱いし、おっぱい揉む揉むつて下品だし。銀髪でオッドアイで気持ち悪いし。』

『・・・ぐずり。』

響はためざめと泣いてしまつた。

『でも・・・その・・・ずつと私を好きで呢てくれるって言つなら・・・考えてあげないことも・・・無いよ?』

無いよ?のあたりで響の眼下には黒髪黒目のツインテール美少女が小首を傾げて頬を軽く染めながらこちらを上目遣いかつし目で見てくるような幻視が見えた。

鼻血を垂らす。

『ど、どうしたの?』

「いや、なんでも・・・。でも本当にいいの?
そのあれだけ言つておいて・・・」

『なんだかんだですっと見てきたんだから。
貴方がどういう人間かは分かつてゐつもり。

・・・デバイスを好きだつて言つほどの変態だとは思わなかつたけど・・・別に悪い気はしないし・・・どうせずっと一緒にいるんだから隣にいる形として、デバイスとして・・・道具としてじゃなくて・・・恋人として大事にされながらも悪くないかなあつて・・・

「あ、あいしてるう・・・」

『キモイから鼻水拭いてよ。

もつつ!』

「すず、『じめん。』

『ちゃんと惚れるような男の子に成長してよ。』

「うん!』

『まかせとけつ!・!』

『まかしといたら不安だから私も手助けするけども。』

「・・・あいかわらず一言余計だな、オイ。』

『それで、無限書庫に入るんでしょ?』

身分証明とか大丈夫なのかな?』

「ふつ。安心しゆ。

俺は出来る男。

そこで身分証明書を売つてゐるオツサンから結構な高額で買い取つた。この世界に来て稼いだ金がぱーになつてしまつたが、これもアイシテルのためを思えばこそ。

痛くも痒くもない。財布には痛いけれど。

『・・・怪しいとは思わなかつたの?』

「何が?」

『・・・もういいわ。どうせ通れないだらうし。』

「何を言つてゐんだよ?」

「そろそろ行くぞ。」

『はいはい。』

もぢるんのこと。

「だ、騙された・・・。」

『でしょ?』

「良い人だつたのに・・・」

『身分証明書をその辺の人に売つて歩く人間が良い人なわけないでしょうに・・・馬鹿のまじや、お嫁さんになつてあげないよ?』

「ま、まてつ!」

今のは何かの間違い、手違いで・・・

『言い訳しない。』

とつとと次の手段を考えて。

「・・・うん」

ちなみに無限書庫には普通に立ち寄せた。
変な身分証明書を見せたがために引き止められただけだったので

る。

「なんという無駄金。」

『アホ過ぎる……』

「まあ……高い授業料だとでも思つて置いて。」

『やつでなきややつてられないわよ。』

無限書庫で調べていくと、デバイスの擬人化。もとい人化は現在ではほぼ失われた技術だと言われている。

現存する人型デバイスは全てユニゾンデバイスといわれ、デバイス単体での戦闘やデバイスを術者が展開した場合の戦闘力の飛躍的な向上から需要や研究は盛んにされているものの、未だ一般化できるほどの報告はないとのこと。

現在は一部の試験機が研究所のいくつかに点在してゐるのみで、もちろんのことそういうたところの技術が外に漏れるわけもなし。早くも手詰まってしまった。

「どうしよう?」

『氣長に見ていくしかないと思つよ?』

「この……図書館をですか。」

響は無限書庫を見回し、げんなりする。

「……とてもじゃないがそんな氣にはなれない。」

『魔法を使えば?』

「どんな?」

『グーグレ先生っていう魔法があつてね……』

さつそくその魔法で検索をかけてみると検索に引っかかった本がひとつでにやつてきた。

やつたね！グーグレ先生！！

「便利すぎる。」

『ほら、とつとと読む。私を人にしてくれるんでしょう？』

「おうともおう！」

日が暮れるまで読み続けた響であつた。

一ヶ月後。

「一、これがあつ！！

ふむふむ・・・なになに？

古代ベルカの夜店の書？』

『それだと訳し方が違う。

私に良く見せて。』

「うん。はい。」

『えーと夜天の書・・・なるほど、確かに。夜天の主に守護騎士・

・・か。』

「で、結局どうすればいいの？』

『この手法だと、まず私の本体はナイフであることには変わりない。それとは別に依り代を用意する・・・人形に私の魂を移すつて言った方がわかりやすい？』

「へー。」

『ナイフは心臓代わり。依り代は死なない操り人形つて言つてもいいかも。作るのに半月はかかりそう。』

『・・・ふふふ、ようやくアイシテルと抱き合える日が・・・』

『・・・まだそこまで許してないんだからね。』

「それを許さない」と「今までだつてこうのやつ！」？」

『て、手を繋ぐ？ それくらい。』

「なつ！？」

なんという生殺しかつ！！

俺がアイシテルに惚れてるのを知つてゐるやつ……。

『う、うるさいなつ！』

私だつて初めてで恥ずかしいんだからそんなことこきなりできな
よつ！』

「・・・・うぐぐ・・・恥ずかしがつてると嘔つながらばまあ・・・許

そう。』

『何様よ。嫌いになるよへ。』

「じめんなさい。』

『よひしご。』

とこうわけで。

さらに半月後。

『・・・・上手く行かないなあ。あ。

「うーむ。』

意外と難しかつた。

それは当然。

仮にもミッドチルダを始めとした全次元世界の研究者がこぞつてコ
ニゾンデバイスを作るうとしつつも汎用化には至つていないのであ
る。

いぐりチートデバイスによる作成とはいえど簡単なことではない。

『とりあえず一回帰る?』

文香ちゃんもいい加減心配してると思つよ?』

「・・・それもそつだな。必要な材料はすでに買い込んであるし。』

ちなみにニニシードナルダのお金はフリーの魔導師として稼いでいる。ちよつとした家が買えるほど稼げたのはひとえに響の魔力的な才能とアイシテルがあつたからこそだ。

『あら? もう帰つちやうのね?』

『ええ、またこつちに来た時はよろしくお願ひします。』

『はい』了解。気をつけて帰つてね。』

『ありがとうござました。』

今通信している相手はリンディ・ハラウォン。なにやら最近、事情のある子供を預かり、その子供と家族の裁判があつたとか。

もといテスタークロッサ家族である。

その家族のことに掛かり切りで忙しいと云ふフリーの魔導師として名前が売れ始めた響のことを聞き、クロノとか云つ少年と一緒に仕事をしていた。

もっぱらクロノが指揮で、響が現場で動くといった具合だ。

さて、原作であるならば彼女は普通に仕事をしつつも裁判に臨んでいたはずだが、ここは現実。

裁判と言つのは法律と言つ名の非常に厳しい決まりがある。例え情状酌量の余地があつたとしても完全な無罪は厳しいと言わざるを得ない。それが社会である。

さらに言えば原作との相違点。

それは山田君によるP.T.事件の介入。NARUTOの漫画には穢土

転生と呼ばれる擬似的に死者をよみがえらせる秘術がある。

それによる反魂でアリシアテスター・ロッサは生き返り、プレシアテスター・ロッサは憑き物が取れたかのように放心し、ついでとばかりに山田君による「そげぶ」・・・すなわちS（説教して）G E B U（ぶん殴る）によりプレシアは「フェイトを娘と見ろ」と言ひ血のオリヌシくさい言葉を頂いたが、結局それだけは上手くいかなかったらしい。

そんな経緯の元、テスター・ロッサ家族を助けるために奔走しているのがリングディというわけだ。

もちろん原作ならばフェイト一人分であるのに対し、さうに2人分の処理が待つていて。

もともとはプレシアは管理局に命じられた実験のせいで娘を失ったことが原因であることもあってなんとか軽い罪にまで押さえ込めそうなのだが、もちろんそれには多大な面倒ごとがある。

そこで頑張る以上、仕事にかまかける暇は確實になくなるわけで体を酷使したリングディに対し、クロノが艦長代理としてリングディの仕事を全てを肩代わり。とはいへクロノもまた裁判に關することで艦を開けることが多く、それでも難しいものがあつた。

そうなるとリングディの艦の主戦力であるクロノが現場につけなくなるために、その補填としてフリーの魔導師である響が雇われることと、いう経緯がある。

あわよくば人手不足解消のため、響をそのまま雇つつもりでもあつたりもするが山田君が管理局勤めである以上、響は入隊するつもりは無いだろう。

『実物がみれればなあ・・・』

「博物館にあるかな?」

『いや無理でしょ。夜天の書ともなれば少なくとも一級ロストロギア指定は受けただろ？』、仮にあつたとしても手にとつて見ないことには・・・でいうかアレ、今は名前を変えて色々な主を転々としてるみたいよ？』

「・・・ふう、しょうがないか。仮にあつたとしても・・・サーチなんでものをかけたら・・・」

『逮捕ね。』

「・・・『氣長にやるしかないんだな。』

『残念ね。』

「ま、いいよ。これでもう一つの『標』に全身全靈を向けられ。』

『何？』

「聞いてたろ？』

ヤツの胸を揉んで、無駄に巨乳にしてやるの。』

『・・・本気だったのね。』

「もちろん。』

『殺されるかもよ？』

「今は腕も上がった。むしろひちが殺してやる・・・のは日本人である俺には無理だが、ぶつ飛ばしてやる。』

『いつそのこと『ジユエルシード』を回収してそれに願えば良かつたかもね。』

「なん・・・だと？』

『記憶の改竄も可能だつたかも？』

「・・・。』

『泣いたつてもう遅いよ。』

『・・・ば、馬鹿なことを言つた。そんな卑怯な手で自分の犯した責任から逃げるつもりは毛頭。』

『あ、あんなどこに『ジユエルシード』が…。』

「な、何ッ！？』

『どこだつ！？』

『・・・責任がなんだつて？』

「・・・。」

響はがつくつと膝を付く。

「アイシテル・・・俺に恨みでもあるのか?」

『安心して。好意しかないよ?』

「・・・からかってるのは分かるけど、それでもドキッとしてしまう自分が憎い。」

『・・・結構本気なんだけどなあ。』

「何?」

『なんでも。』

なんだかんだでようやくラブコメを繰り広げ始めた響である。相手は機械であるが。

「ついで初めてのミッドチルダ旅行は幕を閉じる。

初めてのミッドチルダ（後書き）

因みに本来のそげぶは別アニメの「その幻想をぶち壊す（ぶち殺す）」の略称です。

そのセリフを使う主人公的にこの意味でも問題ないかなーと。

えたーなるりつーたあたつく

地球に帰つてきた頃。響は驚愕した。

帰つて一息と思つたら、いきなり紅い服の柄の悪い美少女に絡まる。

おじいちゃんおばあちゃんのスポーツ。ゲートボールに使うゴルフのパットみたいな物。すなわちスティックと呼ばれるカナヅチを長くした物みたいなのが持つてである。

ちなみにゲートボールとは高齢者のスポーツとして漫透しているが実際はそういった意図なく考え出されたスポーツで、五人一組が基本となる。GBボンバーと呼ばれるいのまたむつみさんが描く漫画ではゲートボールを題材に描かれている。

そんなことはさておき、響は既視感を感じた。そこにはいつぞやの鎌を持つ少女と同じだ。

何かよこせと言われるに違いない。

武器を片手にやつてくる。

ドウ見ても友好を深めようと意図では無いだらう。もしかしたら愛の告白?とひらつと昔の響の思考が漏れ出たが、そんなことがありえるわけがないとかぶりを振る。もちろんそんなはずが無い。

響は考えた。

今回は何も持つていない。持つてこるとすればアイシテルのみ。また何かの誤解だらうか?

そんなことをのんびり考えながら少女の言葉を待つていると。

「てめえのリンクアーコアを渡せ。」

大人しくしてれば痛い田には遭わせない。」

「は、はあ・・・・」

りんかーこあとは?

なんじやそら?

響の頭にクエスチョンマークが浮かぶ。

今までの経験的にきっと何かの誤解だらつと思つた響はまだ話をすることにした。

痛い田に遭うのは「メンだ。

「まあ待ってくれ。何が欲しいのか良く分からんだが・・・りんかーこあつてなあに?」

「ああん?

おめえ・・・それだけの魔力を持つておいて関係者じゃないって言うのか?」

「・・・なんの関係者?

とつあえず何かの誤解だと思つた。まずは落ち着いて話を――――

「まあ良い。

だつたらそれはそれで手間が省ける。」

「・・・いや、自己完結されても・・・きっとちり誤解を解いておかないと大変なことになる気がする。ところがどちらと話を――――
「どわあつー?」

問答無用で、ヴィータはグラーフアイゼンを振るつ。

一応非殺傷設定であることから面倒になつて『絶殺せん』ことを狙つたようである。

・・・ハンマー状の武器を扱いながら非殺傷とつのもべつになつて
るのか良く分からなが。

「ちつ！

運のいい野郎だ。・・・いや・・・その身のこなし。オマエ、やつぱり関係者だろ？

一般人を装つて油断を誘つてところか？
騎士の風上にも置けねえ野郎だ。

男なら――

『カートリッジロード。
ラケーテンフォルム。』

グラーファイゼンの無機質な声が響き、少女。
もといヴィータはデバイスを振りかぶる。

言わずもがな響は騎士ではない。とは言つておこつ。
結局言つてはいるじやん！――うシッコ!!はナシの方向で。

「正々堂々、勝負しやがれえええええええつ――！」

ブースターが出現したステイック改め、グラーファイゼンがブースターの勢いを得てその尖つた切つ先を響に向ける。

響は変形機構を持ったステイックを見て、「なるほど、ステイックに見せかけた尖つたハンマー・・・だつたら良かつたのに。」と勘違いを改め、相手も自分と同じくデバイスを持つ魔導師だと気づく。

『ふろくしょん。』

「ちつ！

「うぜえつ――」

グラーファイゼンはアイシテルの張つた障壁パリアに阻まれる。

「まてまてつ――！

まずは話を――

「じやかあしーっ！…」

「ぐつ！…」

そのままグラーフアイゼンを振りぬくヴィータ。
障壁を突き抜け、響は瞬時にアイシテルをナイフに。
それで受ける。

「ぐつ…やるじゃねえか。

腑抜けかと思えば…・・・アイゼンつ…！」

『カートリッジロード。

ハンマーフォーム、シューター。』

ヴィータがどこからか円球の弾をとりだし、それを投げる。
そして弾をグラーフアイゼンでぶつ叩いて相手目掛けて射出する。
響はアイシテルをセットアップして、西洋鎧を身にまとつ。

「・・・ちつ！」

『カートリッジロードッ！』

剣で受け、弾き、斬り飛ばす。

黒い魔力が迸り、その剣は黒い輝きを増す。

「暗黒的なエクスカリバー！…！」

名前にツッコミをいれてはいけない。

下手に厨二な名前よりはマシだと思われる。

ロングソードとグラーフアイゼンがぶつかり、火花が散る。
魔力で鍛えてるのにも関わらず、ヒビが入るロングソード。

魔力強化を行つていなければ玉を全て弾いた段階で折れていただろ
う。

攻撃力が高い。

そう思った。

「はっ！

てめえも古代ベルカ式を使つてんのかつ！！

意外と見所があるじゃねえ・・・かつ！－！」

「そらどうも・・・いだあああつ！？」

なんつーバカちからつ！？」

「てめえが軟弱なだけだ。」

剣はいともたやすく折れ、響にハンマーが襲い掛かる。
甲冑がなければそれなりの怪我をしていた。

「・・・ところでりんかーーあつて何？」

「はあ？ まだとぼけてんのか？」

それとも本当に分からぬのか？」

「・・・アイシテル、知つてなくちゃ不味いの？」

『別にそんなことは無いと思うけど・・・早い話、魔法を使うため
に必要な器官のこと。

響はそれを狙はれてるみたい。』

『はよ言えよ。無駄な恥かいちやつたじやん。正直それをお渡しし
て帰つてもらいたいんだけど。』

『うーーーん。でもリンクカーコアを取られると最悪魔法が使えなく
なるよ？』

「・・・マジデ？」

『少なくともそれ専用の機関に入院することになるね。』

「・・・そなん？

でも痛くしないとか言つてなかつた？』

『いや、痛いかは分からぬけど……一応内臓の一種みたいなものだからね……なんの影響も無いつてのはちょっと楽観的かな？内臓を引き抜かれて何の影響も無いなんてことは無いでしょ？少なくとも私の知る方法だと後遺症が出るかな……』

「おし、逃げるか。』

『それが上策ね。相手が女の子だとやりにくくもあるでしょうし。「全くその通りだ。』

そんな会話をしつつもヴィータを凌ぐ響。

一応、チートデバイスのアイシテルの性能をフルに使えば勝てることは勝てるのだが、勝つ意味が無い。

それに相手だつて本気でやつてているというわけではあるまい。響も知らぬ奥の手を持つてているかもしれない。逃げるのが一番無難と言つものである。

「降りかかる災厄を、我が身に宿し、全てを屠る惡意の牙
ディザスター……ブレイカアアアアアアアアアアアアアッ！」

周囲の魔力素を急激に収束、圧縮し、打ち出される黒色の激流。

「なつー？これほどの大技をこの短時間に…？」

『カートリッジロード。バリアブル。』

ちなみにコレは見た目が派手なだけの田ぐらましであり、ゆえに即発射が可能だつただけである。

まんまと引っかかったヴィータは勝ち誇るが、すでに響はどじぞくと消えていた。

「はっ。見た目に反して大したことねえな・・・って、ん?
・・・くそつ!!

めくらましかつ!!

あの野郎っ!! 次にあつたら覚悟しろよつ!!」

『帰りましよう、マスター。』

「・・・ちつ、分かつたよアイゼン。はやてが心配するしな。」

こうして逃げただけなのに響は敵対視されていた。

逃げると敵対視されるであろう性格の人間（守護騎士）はもう一人いる。

めげずにがんばれよつ！相馬 韶つ!!

ブッシュトラップ

『そりいえばグラーフアイゼンと言えば、鉄槌の騎士と呼ばれた守護騎士の『テバイス』だつた氣がする。』

「は？」

唐突に何を言つてゐる？

『ほら、夜天の書についての本を見つけたでしょ？ そこにそう書いてあつたのよ。』

「ふーん。それで？」

『だーかーらー。彼女達を撃退。その後をつけていけば夜天の書を見つけられるかもしねりないってこと。』

『ほうほう。なるほど・・・ってバカ言つなよ。

そう都合よく見つかるわけ無いだろ？ 漫画の読みすぎだ漫画の。たまたま名前が一緒だつたとかの方がまだ説得力があるわ。』

『響が言つなつ！』

「・・・試す価値はあるかもしねりないけどさ。このままだとアイシテルの擬人化は下手をすれば20年後とかになりかねないし。」

『一応言つておくけど、何も無いとこから20年前後で守護騎士プログラムを作り出すなんて普通は不可能だからね？』

『はいはい、分かつてます。アイシテルは凄い！ 可愛い！ 格好いい！』

『馬鹿にしてるでしょ？』

『少なくとも可愛いは本心だ。』

『ふーん、なら許すけど。』

『そこは照れて欲しかつた。』

『それよりもどうするの？』

『どうもしないつてば。そもそも戦うのは勘弁。理想を言えば横から搔つ攫うのが一番。あれほど強い人間ともなると多分原作組みの

誰かでしょ？あんなモブ今までに一度も出会ったこと無いし、キャラ濃いし。主人公と戦わせて撤退するところか、主人公組みとやりあつてる隙に彼女を捕縛して詳しい話を聞こう。敵ならば彼女を捕縛しようとしても少なくとも高町さん達は敵に回ることはない・・・と思いたい。』

『漁夫の利つてやつ？

・・・主人公にはなれないタイプね。』

「ほつとけ。」

なんだかんだで彼はこの物語の主人公ではあるのだが。

響達はと「いうと夕食をとりつつ、自宅でのんべんだらりと過ごしていた。

母親はすでに魔法については知っているため問題は無い。

当初、魔法もといデバイスが普通に売られているものと思っていたため、普通に使っていたのだ。

それを見て、最近の玩具はす「ご」いのねえとつい最近まで思っていた文香も文香だが。

この親ありにしてこの子ありとい「うやつだらうか？

一応響は前世の親の記憶を持っているのだけれども。

「何の話かは分からぬけれど、悪いことはダメよ。」

「大丈夫、母さん。そんなことしないつもりだから。」「つもり、じゃなくてダメよ。」

「分かつてゐるつて。」

『で、じゃあ待つの？』

「おうや。伏して機を待つ・・・つてね。」

『名言臭いけど、別に名言じやないね。』

「おわーっ。ドンパチやつてるなあ。」

『なのはなちゃんを助けなくていいの?』

『うやら赤のゴスロリ少女。ヴィータになのはが襲われている。響は黙つて隙をうががうのみ。』

「助けに入つて、まとめて撃墜されるフラグですね?わかります。」

『・・・卑屈になりすぎでしょ。』

『「」うちに残して置いた厨房からの映像・・・見ただり?お話とか言つておいて友達になりたがつてた相手を全力で撃墜するんだぞ?』

正氣を疑うわ。子供は残酷だつて良く聞くけど、それを田の辺りにしたね。戦慄しました。確かに可能性は低いだろ。性格的に。だがアレを見た後だと彼女ならやつしかねないと思わせる何かがある。』で、墜ちるフェイトを助けた山田君が何気に好感度アップと・・・

『「妬ましい、妬ましい、妬ましい・・・三段活用。」

『活用されてないよ。』

「しかも撃墜されて置いて普通に友達にならう的なことを言ひてそれを了承するあの金髪少女・・・フェイトとか言つたつけ?日本語訳で運命を意味する名前、親が厨一としか思えない。というのはともかくとして、あのフェイトとやらもすぐに仲良しこよしじゃん?なのはが撃つたスター・ライト・ブレイカーとやらで服が破れてたから・・・殺傷設定の収束砲喰らつておいてだよ?それを受けておいて友達になるとか・・・心が変態的なまでに広いか、もしくはドMとしか思えない。』

見目麗しいといふのに、変態だったんだ。今更ながら深く関わらな

「ラッキーだつたね。」

『アーリとナーニーが、じみ田ひの子アーリー』

あのフエイトとか言う女の子にまで好かれた山田君に対する負け惜しみにしか聞こえないよ。』

「そ、そんな」と・・・ぬるぬるだいだろ。

『て、つか、私が好きなんですよ？』

浮気は許さないからね。』

「ああ、分かつて。例え今更高町さんや月村さんが“一番田でもいいのっ！私を好きになつて”と言つたとしても俺は！」とわーー

1

中 それは無いから私としては安心ね

『ほら馬鹿な話はここまで。決着がつきたからセットアップし
といて。』

「夢見る」

夢を見るくらいいいじやん……せ、とあ、ふ

響の西洋甲冑が出現する。

ロングツードを抜く。

このロングソード。一応バリアジャケットの一部として展開されているため、バリアジャケットと同等の耐久性を持つのにも関わらずにちょいちょい折れる。

周りの人間がどれほどチート性能なのかが分かるというものである。いまや魔力を纏わせないと使い物にならない。

「その辺の魔導師ならこれで十分なんだけどなあ・・・まあいいや。」
いくよ、アイシテル。――

『いやよ、アイシテル。『ちやんと覚悟決めて、ちやつちやと攻め込まないと援軍が来るからね。』

「わかつてゐる。」

『目標は?』

「それもわかつてゐる。

今回の目標は鉄槌の騎士……もといあのステイック使いの少女の捕縛。そして離脱。』

『おつけー。んじゃ……カートリッジロード。

なおかつブリッジフォーム!…』

鎧が離着。
ページ

ヒラッとした服装に変わり、加速する。

なのはを倒し、本を構え、油断している今がチャンスだ。

なお、なのはに対する誤解はもつ解くことを考えていないため、この件で助けが来たと思われても、むしろまた変な誤解を受けることになつても問題ないと考えている。

ゆえにためらいはない。

「暗黒的なエクス――ヒトヤザシ!…?」

大きな魔力反応が2つと小さな魔力反応が一つ。なのはへ飛来する。それを見て瞬時にバックに下がり、魔力を抑えて隠れる。

「・・・は、早すぎるだろ・・・」

『どうも何かの手段で転移してもらつたみたいね。』

「そういえば高町さんが主人公だということを忘れていた。主人公のピンチに仲間が助けに入るのはお決まりなのに・・・すつかり忘れてた。くそう。」

『悟飯が死にそうになつた時にピッコロさんが助けに入るよつた』ね。

『ふつ、そこでのシーンを持つてくるとはオヌシもやるのう?』

『いえいえ、オヌシほどでは・・・で?』

どうするの？』

「切り替えが凄いっすね。

・・・どうしようか？』

『今出ていつても・・・』

「うん、まあ言わなくても分かる。

確實に面倒だよね。山田君もいるし・・・少なくとも彼は俺を重点的に狙つてくるだろ？から、捕縛ビームじゃないな。』

『主人公組みが撃退するまで待つ？』

「・・・そう簡単に後をつけることが出来るとも思わんが・・・それ以外方法もないしね・・・』

『あ、敵方の援軍もやってきた。』

烈火の将シグナムと盾の守護獣ザフィーラだ。
激しくバトルをおっぱじめる2人。

『ますますつけるのが難しくなったね。』

「・・・今回は退こう。あいつら怖い。』

普通に剣で切り結ぶフェイトとシグナム。
そして殴り合つフェイトの使い魔アルフとザフィーラ。

正直この乱戦の最中に入るのは気が引けた。

『でも弱いみたいだよ？』

「弱いって？誰が？』

『あの守護騎士達。』

多分、まだ夜天の書が覚醒して無いからじゃない？

今ならまだ叩ける。』

「・・・あれで？』

響はアイシテルから田の前の激戦へと視線を戻す。
そして逸らす。

『古代から戦つてゐる騎士たちが、いくら才能があつても10にも満たない子供にまともに戦う必要があるワケないでしょ。

本来ならとつくに潰されてる。カートリッジの有無もあるし。』

「へえ・・・じゃあなんで?」

『だから彼女達シゲナムたちが弱いって言つたの。覚醒して無いから主からの魔力の供給が不十分。

多分魔力ランクで言えばCかDあたりね。』

「・・・え? それで互角に・・・というか推し始めてるつていうのか?」

『戦闘経験と技術、デバイスの性能差・・・」これでカバーしてゐみたい。とんでもない力量よ。だからこそ夜天の書を確保する機会は今を置いて他は無い。いつ完成させられるかも分からぬし・・・チャレンジは出来るだけしておくべき。どうする?』

「・・・どうするも何も時間制限があるなら参加するしかないだろう・・・そんなのが四体。そつとするな。今の内に夜天の書のこと

を聞かないと・・・」

ここから、なぜ素直に話をして夜天の書を見せてくれないのかをたずねないのか?

と気になつた人もいるだろう。

が、夜天の書と主はいわば彼ら守護騎士にとつては自身の身よりも大事な存在。

そんな存在にあわせようとするはずもないし、ヴィータといつねの話が通じない前例がある。

とてもじゃないけどその手は使えないと判したのだった。

こうして響はただひたすらに機会を待つことにした。

ただただ伏して。

響が出て行くタイミングをうかがつていると、『じゅやらヴィータが持つていた夜天の書。もとい闇の書が無いことに気がつく。

「・・・もしかしてなくしたのか？」

『・・・なんとも言えないね。仲間に預けたのかもしれないし。』

「そういうえば守護騎士つて四体だつたよな？他の2人は持つていない・・・というところを鑑みるに・・・」

『確かに本で見た限りでは四体ね。』

「残りは確かサポート系だつたはず・・・捕縛のチャンスだな。主人公組みと集中してゐる今が最大の勝機かもしけん。

気配と魔力を極力隠蔽しつつ捜索しよう。

山田君はなぜか動く様子が見れないし・・・

『彼は見てられない時だけ手をかすみたいね。・・・やたらと原作介入したからといって必ずしても良い方向に動くとは限らないわけだから、主人公のことを第一に考える傾向のあるオリヌシとしてはテンプレな動きと見れるでしきう。』

「つづむ・・・原作を知つていればこちらとしても山田君の動きがある程度予測できるのだけど・・・無いものねだりをしてもしかたないか。とにかく、三人まで来てるつてことはもう1人も来てないこともないだろう。そして戦闘には邪魔な夜天の書を残りの一人が預かっている可能性が高い。あわよくば本を手に入れられる。」

『即時、サーチャーで解析してから返却、離脱・・・ね。』

「おう。」

こつしてアイシテルと響が作戦の細かい部分を詰めて言つてる間も響はブリツツフォームのまま、ビルからビルへと飛び移つてゐる。魔法で飛ばないのは少しでも見つかる可能性を低くしたいためだ。

派手にドンパチやつている今なら変身してるだけの状態で見つかる心配はほほ無いと見て良い。

「サーチをかける」とが出来たら良いんだが……さすがにバレルだらうし。」

『屋上とか見晴らしの良い場所で彼女達の戦いの様子を見てるかもよ?』

「いやいや、さすがにそんな馬鹿な真似……」

そんなバカな真似をしちゃつた緑の騎士服を来たシャマルを響が発見する。

シャマルはうつかりさんなのだ。

普段はしつかりしてるけど時たま失敗する……そんな雰囲気がある。

『バカな真似しちゃつてるね。』

「……いくらなんでもあんな田立つ場所に突つ立つてるのは無い。」

古代からの騎士だぞ?

相手からどうぞ見つけてくださいなんていうことはしないだらう。

おそらくアレは囮の分身とか幻影とか残像とかそんな感じ。

『そりかなあ?』

「そうだよ。だからこの周辺で囮を狙つやつをやうに狙う……そういうのが居るはず。」

『じゃあこの周辺を重点的に探すの?』

「……いや、残念ながら時間が無い。見てくれ。あっちも決着がつきましただ。」

響はフェイトたちの方を見た。
が、大きな魔力反応を感じる。

「これは・・・」

『なのはちゃんのスターライトブレイカーね。あれはまともに殴りえば一撃で沈んじゃうだろうな・・・』

「毎回見るたび思うんだけど、コレって俺の『ティザスター』ブレイカーのパクリだよな?」

『どちらかといえば響の方がパチモンでしょ。存在 자체が。』

「ちょっと!? どうしてそういう酷いことを言うかなつ!?」

『そういう意味じゃなくて、本来この世界にいなかつた人間だったよ、って意味でね。』

「確かに・・・そつにわれてみると・・・」

と、話してゐる間にもスターライトブレイカーのチャージが行われ続ける。

「今から戦闘してたら、一応管理局づとめのフエイトとやらにバレて管理局にも目を付けられるだろしだなあ・・・」

『下手したらリンクティさんたちに迷惑かけちゃうかもよ? 私たちと一緒にいたフリーの魔導師が犯罪者と何かドンパチやつてる! つてなるとね。』

「・・・それは遠慮したい。恩はあれど恨みは無いし。」

『もしくはここから山田君も纏めてティザスター』ブレイカーでさうつちやう?』

「・・・それは望むところだが、無理せずもう一人の騎士の姿を確認してつければ、そなうならそいつをつけて拠点だけでも見つけておこう。ばれないよう、極力魔力を使わずにサーチを行つてくれ。』

『無茶言うね。まあ、これだけ魔力素が溢れてる今ならなんとかできなきことも・・・よし、捉えた・・・つていうか、やつぱりアレ本体みたいだよ?』

「・・・バカなつ!?』

響は悪役がもつとも多く使うである「セリフでトップスリー以内には入っているであろうセリフを言ってしまうほどに驚いた。ちなみに他の一つは「なん……だとつー?」、「まさかつー?」である。

響から途端に小物臭がした瞬間であった。

いや、もとより大物感など微塵も欠片も無いのだが。

「……。」

『バカだつたみたいだね。』

「……ふふふふ。なるほど。」

『ん?』

「本来なら巧妙に隠れてるはずのところを敢えて姿を現すことにより、相手の虚を付く。」

見事と言つぽかあるまいな。さすが古代から生きているだけはある。まさかこの俺がここまで手玉に取られるとは終ぞ思わなかつたわあ

!—!—!

『……言い回しが厨二。』

『だまらつしやいつ!—!—!

とにかく、まんまと緑のやつに嵌められたつ……この借りは必ず返すぞつ!—!緑のやつ!—!—!

『緑のつて……まあ緑だけどね。で、どうするの?なんか山田君にどうのこうの言われて、まさかつ!—!つて顔してるけど。』

「悪役名古屋トップスリーのセリフだな。」

『は?』

「いや、なんでも。」

・・・山田君の目的がいまいちよく分からないうが、とにかくこれはなりゆきを見守るわ。」

『またボコられるかもしないもんね。』

「……つむせこ。もう負けん。」

ミッドチルダで実戦を経験したからな！」

『それだけで勝てるほどスルい相手じゃないけどね。オリヌシにありがちな能力を扱いこなして予想外の使用法……なんてのを考えると思う。』

「はつ、そんな小手先の技。おそるるに足らん。」

『じゃあ纏めてぶつ飛ばす？』

「ぶつ飛ばさん。忘れがちだと思うんだが俺は地球人で日本人。すぐに戦力交渉に頼るのはどうだろ？ それは日本人として正しい選択肢？

俺はそうは思わないな。力を持っているからこそその力を律する強靭な精神が必要であつて、今この場面で一番重要とされる力は武力なんかじゃない。もちろん、やりあえは一人まとめてボコることができ。が、そんなことをしてもしも俺の知らない奥の手があつたりしてなんだかんだで相手2人が共闘し始めて、さらには向こうにいる高町さんたちも加わつての総攻撃を受けかねないわけで、あれだよ。やはりここは日本人らしく交渉、もしくはこつそりあとをつけていくのが一番の最良と思われるのだが、いかがだろ？ 「

『えーっと……意訳すると負けたとき殺されかねないからそんな後の無いような状況で戦いたくない。それだけ？』

「ニコアンス的にはそうだが、厳密的には違つ。」

『だからビビつてるんでしょ？』

「ビビつてなんかないっ！！ そう、これは高度に戦略的な手段なんだつ！！ アイシテルにはまだ分からぬだろ？ けどなつ！！」

『……はあ、どうしてこんなのを好きになりつつあるんだ？ うーへー。』

「ん？ なんて？ 今好きとか言わなかつた？

「え？ 何つ！？ まさか浮気かつ！？」

『……なぜそれだけでその発想に……ていうかこうこう時つて仮に思つにしても“もしかして今、聞こえないような声でどうして好きになつちやんたんだろう？ みたいなことを言つてたんじゃないか？” つて思わない？』

にぶちん主人公・・・ではないだろうし、多分。』

「・・・ラブコメの見過ぎです。正直引く。』

『うん、決めた。人化した後は、まず私が響に対してなんだかんだいにつつもこれくらいは・・・とか良い雰囲気を出しながら、色々とねぎらってあげようかな」とか思つてたんだけど、ますますのは響を血祭りにあげることだね!ちなみにギャグ補正なんていうご都合主義は無いから、覚悟しろよ。でも安心。仮に死に掛けても魔法があるから大丈夫、加減の必要ナッシン。マジ殺すから。半殺すから。・・・ていうかこうこうときこそ自意識過剰スキルの出番でしょうに。』

「え、つ!?いや、まてつ!?

意味が分からぬ、といつかそんなアイシテルも俺は好きだよつ!?

『今更フォロー遅いから。絶対絶対ゼーつたい、ぶつ殺す。』

「・・・』

人化が可能になつた暁になるころには忘れてくれることを祈る響だつた。

とかバカなことを言つていてシャマルが引くことを決め、他の守護騎士達も撤退を決めたようだつた。

山田君が「つ!?・・・なのはの魔力が急激に感じられなくなつていく・・・まさか、俺が介入して未来が・・・いや結果的には変わつてない。が、どうこうことだ?」といつ眩きを漏らす。

山田君は考えたのだ。

今はA-sのイベントに入つていて

ハ神はやてと闇の書事件に突入したところ。

山田君としてはこの問題を非常にデリケートで危ういバランスの元、ハッピーエンドに近い形に収まると言つことを正しく理解してゐる。下手をすれば一つの世界が滅亡する。せつかく概ね良い方向で終わ

るはずなのに、介入によってその未来が悪い方向へ変わるのを恐れたのだ。そのため今回の件では特別介入するつもりは無かった。

が、さすがに、なのはのリンクアーコアを奪われるのは見過せない。リンクアーコアを集めると言うだけならば何もなのは達でなくとも良い。

助けてあげたいと言う考えの下、遠隔でシャマルがなのはのリンクアーコアを奪うはずだったのを妨害に走ったのが山田君の思惑である。色々な術者のリンクアーコアを奪えば奪うほど闇の書に刻まれる魔法の種類は増えていく。

なのはの強力な魔法、スターライトブレイカーをリンクアーコアと同時に蒐集されないために妨害するのもありだと考えたのだ。さらには最終局面で闇の書の管理人格を下し易くなるとも考えている。

だが、結局なのはのリンクアーコアは奪われてしまった。
当然である。

向こうには実質戦えるのがアルフとフロイトのみ。
残りは補助役のユーノ。怪我人のなのは。

しかしフェイトもアルフも押され、ユーノは戦いは専門外。一対一という状況も相まって粘ったものの撃墜。なのはは一度負けた相手と再度戦うことになる。怪我人であることもあり、援軍を呼ぶべく結界を壊そうとしたところをヴィータに撃墜、リンクアーコアを蒐集された。

フェイトとアルフもこのままでは負ける。

ヴィータも加わるのであるからして、当然の帰結と言えるだろ？。

「ヴィータ。引くぞ。シャマルを回収。後に転移を混じえながら撤退する。」

「はあっ！？」

「何言つてんだよ、シグナムつ！-！」

もう少しで金髪の方も蒐集できるんだぞー！？一二三で取れば今日だけで40ページ以上が埋まるんだつ！-！」

「ヴィータ、深追いは禁物だ。」

それに先ほどからシャマルとの連絡が取れない。」

「ザファイーラまで・・・でも・・・あと少しなのに・・・」

守護騎士達は念話で引くことを考える。

何よりも一番の留意点は闇の書を持つていてるシャマルとの連絡が取れないことだ。

「ヴィータもリンクアーコアを持ったままではろくに戦えまい。それを傷つけてしまえば今日の頑張りが全て無駄になる。それに・・・気づかないか？」

私たちの戦闘に紛れてこそ二ノ河の回るネズミが一匹。どちらもシャマルと近い位置にいる。」

「なつ！？」

「どおりで連絡が取れないわけだ。」

「私も先ほど気づいたところだ。日ごろから親しみのあるベルカ式でなければ気づけなかつただろつ。魔法の扱いだけならば今回の敵よりも上手い。すぐに救援に入る必要がある。ベルカ式を使つと言ふことは・・・近接戦を主とする相手だらつ。戦闘を不得手とするシャマルとの相性は悪い。」

「ちつ！しゃあねえか。」

「ならば我らが取るべき行動は・・・」

「ああ、田の前の邪魔者を振り払つて、早々に引くぞ。」

シグナムたちの猛攻が始まる。

十全とは言えずともヴィータの援護もあり、一分と経たずに撃墜されるフェイトとアルフ。

シグナムたちがシャマルの場所へ行くと、山田君が立っていた。

「あいつらはどうした？」

「死んではいないだろ。それで、貴様も邪魔するのか？」

「・・・いや、あいつらが無事なら良い。」

「や」でこわい顔で隠れてるやつも出てきたらどうだ？』

シグナムが一点を見つめる。

その影に隠れていたのは響。と思つたが、

昔の響もとい厨房だった。

山田君の田線が厳しくなる。

「さすがのオマハだつて、今回の件がどれほどテリケートなのかは分かつてゐるだろ？」

分かつてゐるとは思つが邪魔はするなよ？」

「オイオイ？」

なんのためにこの世界に来たと思つてゐんだつ！

「こで良いとこを見せねばを全員をハーレム入りに出来るつー！」

種明かしをすると、サーチがばれた時のことを考え、出でることか言われた時のように厨房を用意していたのである。
相変わらずのイタイざまは治せないらしい。

ところはアイシテルの談で、実際はアイシテルの嫌がらせである。

どうして嫌がらせをしたのかは乙女心というヤツであり、もういちど前回の話を見てもらえれば分かること。一応相手の敵意を煽つて山田君の目的を聞き出すためでもあった。

シグナムたちはなんのことか分からぬようで、ぽかんとしていた。彼女たちを敵に回したいわけではないので、わざとボカした言い方をするように設定してある。

でなければ「そこのおっぱい騎士を始めとした——うんぬん」というシグナムたち——特にシグナムの敵意を煽つていた結果になることは言わなくても分かるというもののよう。

「てめえ・・・悪いが世界が掛かってる。同郷の人間とは言え、殺すときはキッチリ殺すぞ。まさか前回見逃したからって俺が優しくて勘違いしてるんじゃないだろうな？」

今ならまだ許す。この件から手を引け。」

今ならと言つてる時点でなんだかんだで彼も優しいようである。見方によつては甘いともいえるかも知れない。だが、見方によつては上から目線で何様よ?とウザがられるかもしれない。

彼は世界を救いたいだけだとつづく。とつづく方だと途端に彼を薄っぺらく感じるは何故だろう?。とつづく疑問もほどほどに。

厨房はボンと音を発して姿を消した。

これには山田君も何がしたかつたのか不思議になりシグナムたちと同じく、首を傾げる。

山田君の見た目は普通なので首を傾げてもなんら可愛いとは思えないと言つことは言つておく。

これが響であるなれば一応見る分には眼福ものなのだがそれは余談。

「・・・もひ少し、ビルにかならんかったのか？あれは。」

『まあまあ。』

「なんか凄い楽しそうですね！」

『乙女の萌えキュンなセリフに対しても酷いこと言つからりよ。』

「貴方のほうがよっぽど酷いと思いますけど…？」ていうか萌えキュンなセリフって何よ？」

『・・・はあ。それよりもほら、目標が動いたよ。さつさと転移先を捕捉しないと撒かれる。山田君の目的も分かつたことだし、あとは一番大事な仕事。』

「・・・きつと誤解だと思われ——」

『とつとつするつ……』

「いえす、さーつ……」

そうしてシグナムたちを追つていいくと——シグナム達は管理局の追つ手を警戒し、拠点がばれないようにさまざまな次元世界を移動しながらも——ようやく拠点らしき場所に付く。ばれないうにつけるのはかなり骨が折れたらしく響も珍しくアイシテルも疲れた様子を見せている。

『ようやくね。』

「んと・・・この家に入つていつたな。何々？」

ハ神はやて？男か？借金執事を思い出す。

てつくり、魔法少女ばかりが出てきてたから今回もやうかと思つてた。

うつむ、男か。まあ9歳児かつなのはや田村さんを見るに良い子が多いみたいだし。この子もその可能性が高いだろ。いや、奇をてらつてクソガキという可能性もあるな。』

『不用意に近づくと結界に感知されるよ。気をつけて。』
「すり抜けられない？」

すに拝ひ、されなし。

様子を見たいんだけど。

『覗きは犯罪だよ。それにそんな都合の良い術があつたら結界なんていう術式が今の今まで残つてゐるわけ無いでしょ。』

「犯罪とは失敬な。敵情視察だ。」

『 』 『 』 『 』 『 』 『 』

「俺の中の罪悪感が変わった。」

!

「おおおおおおこつ！？」

やめんかー!!

はあはあとイキナリの大声で息切れを起こす響。

ちなみにハ神家の面々は気づかなかつた。などといふわけではもち
ろん無く。

りすね

アイシテルは魔法で響にたけ聞くことができるとしている

『アリスの日記』

「へへむ、そこだ。問題は、まず考へてゐるのせ——」

響が考えたのは二つ。

1
?.

このまま立ち去る。これから先、捕縛できる機会はいくらでもあるだろう。が、夜天の書。もとい闇の書を完成されかねないという問題がある。仮に完成が先だとしても彼女たちと戦い合えば下手をす

れば自分で管理局に田をつけられることになりかねない。ミッドチルダでは管理局の職員であるリンディやクロノにお世話になつたし、響には原作知識が無いためこれは出来れば極力避けたい手法だ。2つ。

夜天の主と話をする。

この世界にいるといつことは日本人である可能性が高い。守護騎士に話が通じなくともこのままたずねて主にあつてしまえば意外と話だけで終わる気がしないこともない。

ただし完全な悪役キャラだった場合、その場で守護騎士と主に囲まれ、叩かれる。

逃げるだけならばなんら問題は無いが、彼女たちを凌ぎつつも結界を破るのはかなりしんどそう。

ちょっとした油断で倒されかねない。何より響は痛いのはごめんである。ちょっとでもその可能性があるならできれば避けたい。

3つ。

そもそも人化を諦めてアイシテルが一から作り上げるまでの20年をただひたすら待つ。一番楽である。が、自分の好きな女の子？と手を繋ぐための手段がすぐ田の前にあるかもしれないのに指をくわえて20年待つのは非常に辛抱たまらない。

よつて論外。

『・・・守護騎士のプログラムを見せてもらつだけだし、お願ひするだけしてみたら？』

「うむ、2つ目だな。

親切な子であること願いたい。』

というわけでインター ホンを押してみた。

ぴんぱーん。

久しぶりに唐突に劇的にピンポンダッシュをしたくなつたのだが、

やめた。

さすがにアホ過ぎる。

『どうひらめですか?』

イントネーションが関西の人っぽかつた。

関西人か。漫画やアニメのキャラは大抵似非関西人であることが多いと聞くが、この子はどうなんだろう?とかどうでもいいことを考えつつ響は応える。

それと声は女の子のようだ。でもこの時期は男の子も変わらず声が高い。

結局どちらのかは分からない。

「・・・突撃、隣の朝ごはんの者です。」

ボケてみた。

『今は晩御飯の時間なんやけど・・・』

「ふつ、俺のお茶目な部分を出してしまったようだな。」

『あの・・・イタズラなら帰つてもらつてええですか?これから晩御飯なんで・・・』

「ほうそれは良いことを聞いた。お邪魔させてもらつていいかな?」
『なぜに初対面のアンタ家に招かなアカンのや。しかも晩御飯を頂く気満々やん。ずつずつしいにもほどがあるわ!』

「そのキレのあるツツコミ・・・関西では有名な芸人と見た!

『図星だらう?』

『・・・。』

「なぜ分かったのだと黙つ、間だな。今のは。」

『いや、あまりの検討外れぶりに呆れてただけや。』

『なんてこつたい。恥ずかしい。』

『・・・そこなら。』

「ちよつと待つてーー」みんなさいつーー眞面目にやります。」

『・・・ハナからそうしてや。で、なんの『用向きですか?』』

「とりあえず話が長くなりそう。ゆえに俺は寒空の下凍えながら話さないといけなくなる。つまり家に入れて?』飯いらないからさ。』

『ほんまづうずうしじやつちやな。』

・・・まあえか。胡散臭いけど悪い人じやなもそつやし。シグナ

ム迎えてあげたつて。』

『分かりました。はやて。』

めちゃくちゃ怪しいと思つていたアイシテルだが、子供の外見が功をそりしたのか普通に招かれることになった。

響はそんなアイシテルに対し「どうよ?この粹な会話で警戒心を解く手腕は!?」と、どやああ顔をしていた。
もちろんそんな響をアイシテルはキモイと思つた。

ハートフル「メモ」

「うちは八神はやて言こます。ひらがな三文字では・や・てや。変な名前やろ?」

「言われて見れば変だな。」

「ああん?」

「いや、『冗談です。睨まないで。』

正直な気持ちを言つたといつに、いつぞやの赤い少女に睨まれる響。

自分で言つてるから気にしてないのかな?とか思つたゆえだが、年頃の女の子が気にしてないはずも無く。少なからずはやてからの好感度が下がつた響だつた。

はやてなりのジョークであり、実際はそんなことないよと言つて欲しい―――いわゆる押すな押すな・・・いや、押せよーといつフリである。

関西人は皆こうなのかな?とかどうでもいこうとを思つたアイシナルの心境はさておき。

『どうも魔法を知らないみたいなんだけど・・・どうこうこと?いや、知つてはいるけど触り程度つて感じだな?それと男の娘だつたようだ。』

『・・・秘密にしているとか?・・・それと普通に見た通りでいいですよ、女の子だよ。』

『なんで?』

『こんなに可愛い子が女の子のはずがないよ――』

『・・・言つてみたかっただけ?』

『・・・よく分かつたな。』

『多分、女の子であらうとは分かつた。そうじやなくてだな。と

りあえず話した感じ人に迷惑をかけるようなことをする風には見えないんだけど……人は見かけによらないってこと?』

『うーん?』

単純にこいつそりやつてるとか?』

『え?』

守護騎士が独断で?

仮にも騎士なのに?

仕える主君

に

あたる人間の意向を無視して勝手に動くわけ?』

『……分からぬわね。单刀直入に聞いてみたら?』

この間、響を睨み続ける守護騎士達。

その目線はどこか「何も言うな」と語っている気がする。

が、響は無視した。といつも氣づかなかつた。

「あのさ……单刀直入に聞くけど、人をおそ——がはあつ!?

「げふつ!?

シグナムが響を殴り、ヴィータがタックル。

ザフィーラが犬形態でさりげなく響とはやての間に入り、シャマルはドジッたフリをしてはやてに覆いかぶさる。いや、シャマルだけはあまり理解しない様子なので素でドジッたのだろう。

「いたたた、ごめんなさい、はやてちゃん。転んでしまいました。大丈夫ですか?」「え、ええよ。それより監、ど、どうしたん?」

「いや、おまつ!?

はやてとやら、オマエは守護騎士にどういう教育を——げぶふるつ!?

ヴィータが抱きつきつつもはやてから見えない角度で響にブローを加える。

シグナムはそんな響にたちして耳打ちした。
「ちょっとドキッとしたのは秘密だ。

「そのまま何も言つた。主にバラした場合、我が剣に誓つて貴様を殺す。地の果てまででも追いかけてな。」

「どうしたん？シグナム、ヴィータ……そんなに近づいて……ヴィータに至つては抱きついて？」

「いや、これはだな、はやて……えーっと……」

「ヴィ、ヴィータはこの少年と友達なのです……」

「や、それだ！シグナム。そう、あたしはこいつと友達になつたんだよつ！……なつ！？ そうだよなつ！？ そりやないと……」

ヴィータの手の中には待機状態のグローフアイゼンが鈍く輝いた。響は冷や汗を搔きつつも首を勢い良く振る。

「……なんか変やで？」

「まさかあつ！……ほら、オメエもなんかはやてに言つてやつてくれよ……」

「えーっと……健全なお付き合ひをさせてもらひます？」

「……付きあつとるんか？……まあええけど。隠し事は悲しいで。」

「いや、はやて、あのな……」

このとき、響に名案がひらめいた。

「こではやてを誤魔化すことで恩を売ればこいつに要求を通し易くなるのではないか？」

姑息でみみつちい思考だが、彼という人間はそんなもんである。どうか親しみを持つて接してあげてほしい。

むしろ「いや、俺がしたいからただけ。お前達が気にすることじゃない」的な主人公らしき臭いセリフを聞いて「・・・オリヌシですね、わかります。」という程度には自分が小物であることを理解してるだけ、好印象というものだ。

「ええ！ヴィータさんは結婚を前提としたぶふるつ！？」
「な、ななな何言つてんだてめえつ！？」

ヴィータが顔を赤らめて響を殴る。

「な、何をする！？」

人がせうかく誤魔化すのに協力しようとしてやつてゐるのにつつ！」
「だからつてアホいつてんじやねえつ！－てめえなんかと誰が結婚すつかつ！！

「ジジイの意味だそれは。」

ザフィーラが苦虫を噛み潰したような顔で呟く。
もちろん犬と結婚するわ・・・的な意味である。

「ねせせせせ」

それを見てはやてがやたらと笑う。

スルーされた。

すなわち「イツ性格悪いなどと考へ、響からはやてに對する好感度
が少しくらい」。

が、下がろうが上がろうが彼女が響に対して本気になることはまず

無いだらうから問題ないだらう。

残念なことに。

「ど、どりしたんだ？ はやて。」

「いや、な。最近、シグナムもヴィータもザフィーラもシャマルも。なんかどこか気を張り詰めてたやんか。ちょっと前に私の体をシャマルの魔法で見てもらつた・・・そのあたりからや。やっぱり私の病氣で心配かけてんのかなあとか・・・ちょっとアレやつたんやけど、こうして馬鹿みたいにしてるヴィータを見るとな・・・そんなん幻に見えてきて・・・」

「はやて・・・」

「ええか、ヴィータ。皆が私を気にして心配してくれるのは嬉しい。最近遅く帰つてくるのもなんかやつてきてるつてのはわかつとる。きつと皆は優しいから私のためになんかしてくれてるんやろ？ 図書館いつたり、病院回つたりとかそんなん感じやろか？」

「主・・・」

「疲れてるのも隠してるみたいだから気づかんフリしどつたけど・・・やつぱりうち、こういう空氣の方が好きや。こっちのほうが好き。せやからどこか行く位なら一緒に居て欲しい。みんなの優しさを無視する様で・・・悪いとは思うんけどな？」

「わがまま・・・やろか？」

「別に死ぬわけでもないしな。」

「はやてちゃん・・・」

「ヴィータだつて最近はどこか笑顔に元氣なかつたやんか。久しぶりにみたで。ヴィータの笑顔。」

「え、笑顔だつたか？」

響はもちろん、いきなりのハートフルな空氣に居たたまれない感じになつた。

空氣読んで帰るべきだらうか？

やつといひで声をかけたらまた殴られやうだらうな。とか思つたので
いつそり部屋を抜け出すことにした。

玄関まで来て響は呟く。

「・・・俺、何しに来たんだらう・・・」

『まああんな空氣だされちゃねえ。』

「・・・殴られに来ただけつていひ。うん、まあ慣れつただけどね。
ひつこうなんかアホらしげ田に遭つ。』

『・・・元氣出して。』

「田を改めるところ。』

ひつして響はちよつと会話して殴られて、タックルされて帰つたの
である。

枕を濡らしたのはいつまでも無い。

次の日。八神家へ。
インター ホンを押す。

『なんや、またアンタか。』

「・・・ええと、昨日は勝手に帰つて悪かつたな。』

一応、自分からたずねておいて勝手に帰つたことを説ぎる響。
内心納得などいってないが、こひはもつ仕方ない。

『全く・・・とつあえず入つて。』

「・・・?」

いいの?』

『寒空の下話すのは嫌なんやろ?』

「・・・。』

『なぜ泣く?』

「いや、久々に人の優しさに触れた・・・といふか人に優しくしてもらつたというかね?』

『・・・まあ詳しく述べへんよ』

響の中ではやてに対する好感度が急上昇した。が、重ねて言うが響からはやてへの好感度が上がったところではやてが本気になる」とは恐らく無い。むえに全く意味の無いことである。

「八神はやてや。』

「それは昨日、聞いたけど?』

「八神はやてや。』

「いや、だから・・・。』

「こっちが自己紹介しとるのこ、そっちはないん?』

「・・・。』

「なぜ泣く。』

「いや、ちょっと優しさに・・・。』

「この普通のやつとりで泣くつてどういうことやねん。』

「いや、すまん。てつきりまた何かのハプニングが生まれるものかと思つていて。』

「はあ?』

「なんでもない、こっちの話。俺は相馬響。よろしく・・・して

くれなくともいいかな。』

「・・・偉い後ろ向きな挨拶やな。正直、悪印象しか『えへんで?』

原作組みのキャラクターと仲良くなれば、それだけ後からくる別れも寂しくなる。

なぜなら昔の自分を知るのはや山田君とお友達になるだらうからだ。そこから「あいつ、アレだから『氣をつけなよ!』的なことを言わると分かっている響としてはあまり積極的に仲良くなろうとはしない。

「・・・じめんなさい。」

「いや、謝つて欲しいわけやのつて・・・まあええか。そういうや今は廻やナガ学園はどないしたん?」

「今日は休み。」

サボつただけである。

「ふうん。うそ臭いけど、それもまたええ。」

「で、早速本題に入つてとつと帰りたいんだけども・・・睨んでくる赤い少女が怖いので。」

また来ると察していたのか、守護騎士は全員揃つている。

「それなんやけど、響君・・・えと、名前でええか?ええな?まあ気にせんといて。で、響君はヴィータたちに話があるりしごつてきいたんやけど・・・そんなん?」

「ええつと・・・まあそつかな。」

実際は主のはやてに聞きたいのだが、どうも彼女は闇の書について

どこのか魔法についても良くなは知らないみたいである。

そして勝手に名前で呼ぶことを決定してしまった。女の子から下の名前で呼ばれることにトキメく響。

これこれーこりうのが欲しかったんだつ!ー

とか思つたけど、再度いづれ自分の過去がばれることになることを考へると素直に喜べなかつた。

ばれた頃にはきっと「キモ太郎」とかそんな感じの名前で呼ばれるに違いない。いや、違うが。

話を戻すが、蒐集のことも知らないし、何よりも下手に喋つたらボイン騎士に斬られかねない。〔冗談ではなく。ゆえに全ての事情を知つてゐるであらう彼女達と話すのは望むといつた。

見捨てないで

「主はやての病を治すために我らは蒐集を行つてゐる。」

シグナムのそのセリフから、とつとつと語るのを聞くに響はハ神はやてが病を患つていることを聞く。

おっぱいチートで治す事を考えたのだが、揉ませてくれるはずもあるまい。いや、治るとなれば揉ませてくれるだろうが、治つたとしても一時的なもので根本の闇の書との契約を解かない限りはやてに安息の日々は訪れない。

病は本によつて引き起こされる魔法的な何かのようである。となれば本 자체をどうにかすれば良いのだが、そんな術が都合よくあるはずもなく、本におっぱいがあるわけでもなく。

響の手持ちの手段ではどうにもできないことがわかる。

響としては原作組みがどうせどうにかするだらうから、助けれたら

ついでに助ける程度でしか無くあまり深刻には考えていない。

山田君の世界がどうのと言つていた件もある下手に手を出すのは良い選択では無いだらう。

それよりもアイシテルの人化の件だ。

事情を説明し、本を見せてほしいと「本はさすがに無理だが、私の体ならば幾らでも貸そう。私の体でも十分に用を成せるはずだ」という許可を頂いた。

状況が状況ならばちょっとアレな——えりにセリフであるがもちろんそんなことはない。

「それでもヤケに素直ですね・・・」つまですんなり行くとなるかの罷かと思うんだが、どうおもうへアイシテル。」

『……うーん、まあそういうタイプに見えないし、大丈夫じゃない?』

ただ剣を振るうしかない愚直な剣士って感じだよ?他の三人も謀には向いてないでしょ。仮にも騎士を名乗るわけだし。』

「そういう相談は一人きりの時にやつて欲しいものだが……剣を振るうしかない……か。」

概ねその通りだが、それしか能が無いと思われるのも心外だ。一手交えるか?』

「いや、遠慮します。』

「そうか……』

ショボーンとするシグナム。

あ、可愛いと思つたのは心の内の秘密。

「素直に身を任せるのは恩があるためだ。』

「恩?』

「主はやての悩みに———気づかせてくれたのはお前だ。受けた恩は必ず返す。それがベルカの騎士の剣とは別の誇りでもある。』

「……ええと、それならお言葉に甘えて。』

頭で思い描いた形とは異なつたが、結果オーライ。いつのまにか恩を売っていたようである。

相手が勝手にすすんだ事柄に対しても勝手に恩を感じてくれているならばそこを利用しない手はない。

『……心が狭いよ。』

「う、うるさいな。確かに俺もここで“いや、そんなに気にしなくてもいい”とかそんな感じのセリフを吐きたいのだが……これを逃したらいつまたチャンスが来るか……』

『まあそれもそうだよね。』

「さつそくサーチャーにかけさせてもらひうなび・・・準備は大丈夫?
?」

「ああ、構わない。」

「それじゃよろしく、アイシテル。」

『あいあいさー。』

そしてサーチ。

解析。

組み立て。

『これならすぐにでも作れるよ。』

「まじかっ! ?早速お願ひつ! ...」

『ええと・・・こうして・・・』うして・・・』

魔法陣が展開。

魔法陣に描かれた紋様がめまぐるしく変わりつつ、魔力が徐々に徐々に人の姿を模つていく。

「見事なものだな。お前達は研究者の類か?」

「いや、ただの魔導師。」

「ただの魔導師が闇の書を求めはしまい。」

「さつきから何度も聞くけど、闇の書って何?」

夜天の書が正式名称じゃないの?シグナムさんまで俗称で呼んじゃつてさ。」

「は?」

「え?」

アイシテルの体が完成。

黒髪がたなびき、両サイドで纏まっている。すなわちツインテールで見た目は14歳ほど。発展途上の胸がたゆむ。

そして、そのまま宙に浮いている。
まぶたがゆっくりと開かれた。

「これが人の体か・・・予想以上に重いな。」

自分の体を見回すアイシテル

脇は着てしない。すこほんほんのままた手でこ賣りながら、尋問からじろじろ見る。部書。

それに気づいたアイシテルが殴る。

「ぐいっ！？」

「別に元ハイスクールだしお恥心は無いけど、そういうの見られるのは不愉快よ。ていうか、視線がエロいバカ！！」

いやエロいのは男なら仕方が無いわけですが……どうあえず服を着てくれませんかね？

「そうね。えーっとバリアジャケットを展開しちゃえば良いか。」

プリツツフォーム時の服装を展開するアイシテル。

叫びながらアイシテルに抱きつきにいく響。しかし足が翻り、響にクリーンヒットした。

「だ、だからそれは恥ずかしいからまだダメ。」

少し顔を赤くしながらそういうの給つ。

若干もじもじするのが可愛いのだが、響は気絶したため見れない。

「・・・仮にもオマエの主だらう? 足蹴にしていいのか?」

「別にいいの。響だし。」

「・・・そつか。」

シグナムはあまり深く突っ込まなかつた。

響が目を覚ますと良い臭いがしてくる。

そして何かを煮込むような音と、談笑が聞こえた。

「んぬ・・・」には・・・といつかいつから寝てたつけ?」

「あ、起きたんだ?」

「ああ、なんか良い夢を見ていた気がする。

・・・誰?」

響が声のした方向をみると見知らぬツインテールの黒髪美少女がいた。

もちろんアイシテルである。

「寝ぼけてんの?」

「いや、至つて正常だと思うが・・・あれか?」

日々彼女を欲しがつていたがために現れた俺の脳内彼女?」

「・・・殴るよ?」

「いや、なぜ殴られるのかが分からぬ。アイシテル、状況説明プリーズ。」

「見たまんまでしようが。」

「俺はアイシテルに聞いたんだ。どこぞの好みのタイプ・・・もといアイシテルの人化姿がこんな感じだつたら惚れ直すであろう美少

女である貴様には聞いてない。で、アイシテル、早く応えろ。なぜ無視するの？』

「いや、だから私が……」

「ちょっと、うるさい。今俺はアイシテルと話してるんだ。よく分からんがここにいるということは魔法関係者だらう。アイシテルとの蜜月の時を邪魔するんじゃない。』

「……はあ、まあいいか。すぐ気づくでしょう。』

「アイシテル？アイシテル？』

おい、どうした？』

なぜさっきから無視し続けるの？え、まさか愛想尽かしたとかそういうことじゃないですよね？』

俺、オマエから見捨てられたらもう誰も頼れる人がいないんだけど・・・ちょっと、うんとかすんとかでいいからそれだけでも応えて・・・』

・』

響は人化したアイシテルに気づかない。ゆえにかなり瞳を潤ませている。

そして体が振るえ、今にも号泣しそうだ。

それもそうであろう。

今となつてはどんな時でも一緒に居てくれたアイシテルこそが響にとっての最愛の人？だ。

そのアイシテルに愛想を尽かれたとなつた響の心境は想像を絶する。殺されかけるような誤解を受けることがあってもアイシテルがいたからこそ耐えられた。

そんなアイシテルがいなくなれば響は首を吊つて死ぬか引きこもるかの一択しかない。いやさすがにそこまで絞られはしない・・・と思われ。

「うんとかすん。』

「だからオマエがそれを言つてどうするつー？』

俺をからかつてるのかつ！？

・・・くそつ！－！皆して俺を・・・俺をバカに・・・して・・・
アイシテルまで・・・うぐ・・・ぐず・・・どうしてだよお・・・
アイシテル・・・アイシテル・・・あいしてるう・・・ぐず・・・

目に涙を溜めて、もう泣いているといつてもいい響。アイシテルはため息を吐いて、響を抱きしめた。

「アーリーは、まだお出でにならぬでしょ、ばあちゃん。」

…あししてる？

「そりや、他に響なんかを慰めてやるよ」な物好きは居ないでしょ。」
「わからなさいよ。」

そのまま抱きしめ返す響。

「ちょっと…？ そんな強く抱きしめないで…？ ひん…！？ ちょっとどびに触つてゐるよ…！」

「おお、羣ぐんぐん！」

ムサシノノカミ

「一、お、那籠のついた黒い羽衣を。

「なんつーか、これもまたあつたけえよな。

「私は響君の過去が気になるわ。」

「アシタシ、立派だ。

もちろん、一つと見られていたのは言うまでもない。

優しさに触れて

「お見苦しいところを。」

「ほんと見苦しかったからね。」

「早くアイシテルが言えれば良かっただけじゃんつ！…」

「まさか記憶が飛んでるとは思わなかつたし。」

「うちからすると、かまへんよ？

面白かつたし。」

「八神貴様、俺はオマエといつか拳で語る——一日なんてこないですよねハイ。」

はやてに拳で語りついぜーをじょうとしたらシグナムとヴィータに睨まれた。

「八神で……つけの名前好きやない。可愛いし。名前で呼んだって。」

「何を言つ。名前の方も大してかわいくはない——ありまくるツスはいつ！…」

睨まれたので。

「それにしても昼飯が豪華だな。

いつもこんな感じに食べてるの？

食卓の横で寝かされていたわけだが、食卓にはなんか手の込んだ料理がずらりと並んでいる。

そして近くにはザフイーラが犬要の餌皿で伏せて待っている。至極気になつたのだが、オマエはそれでいいのか？ペディグリー ヤムでいいのか？とか餌のメーカーがそこでいいのか的な意味ではない。

「何言つてんの？」

お密さんが来たら普通はちょっと豪華になるやうに？粗末なもん出したら恥ずかしいやん。」

「お密さん？」

寝てる間に誰か・・・まさか奴らの内の誰かか？！？

これはいかんつ！！

アイシテル、早々に帰るだ？！？ほり、何のんびりしてんの？？そして“こいつマジで言つてんの？せつかくの美味しそうなご飯を食べずに？”みたいな目をやめこつ！！

アンタはずつと見てきたでしょ？がつ！・・・ソレでやつらに俺の醜態がばらされた場合、月村家の悲劇の一の舞だ。あんな氣まずい状況、とつとと逃げるに限る。ていうか何、あんたは普通にお密さんポジションに付いてるのヤシ！？

「響、落ち着きなさいよ。別に誰も来てないから。」

「・・・は？じゃあどうしてお密さん？」

ああ、なるほどアイシテルがお密さんってこと？確かに魔法を良く知らない人間からしたら――いや、あんた不法侵入者じゃね？ま、まで八神つ！？

アイシテルは不法侵入者じゃなくてだなつ！――これにはふかーい事情があつて・・・だからこそどつあえず警察は面倒なので呼ばないで欲しいと願つてみたりつ！？！ていうか手遅れですかッ！？

「凄まじい速さで自己完結してるとこ申し訳ないやけど、それら全部勘違いやから。」

「なん・・・だとつ！？」

「確かにアイシテルさん？勝手にアイちゃんつて呼ばせてもりとるけど、彼女はお密や。一応、デバイスうんぬんてのも聞いた。不思議なこともあるもんやなあ。本のこともそうやし・・・」

「そ、そうなのか？だからアイシテルはそのおいしそうなご飯を1人で食べようとしている・・・と？」

一応、主人である俺をほつほつて？

1人で？

いや、まあいまさらこの程度で泣きはしないけど……酷く悲しい。なによりアイシテルにほつほとかれたのが一番辛い。やつぱりちょっと泣きそう。でも泣かない。だつて男の子だもんつ……！」

「いや、あんたもお密や。つかキモイで？」

「まあかあ！？あははは、なかなか面白いジョークだ。」

「いや、家の主人である私が言うところになぜまさか！なんて言葉が出るん？ていうかどこに笑う要素？」

「きっと何か誤解があると思う。とにかくわけでもずばばづして俺をお密だと思ったのかを聞かせてくれ。」

「え？」

いや、そら、うちはきたんやからお密さんやろ？

「うむ確かに……うん？あれ？」

「はい？」

「いや……何も……変じやない？」

「とにかく座れよつ！はやての飯が冷めちやうだろ……」

「ああ、ごめんなさい、赤いの。」

「赤いのじゃねえ……、ヴィータだ。次にそのふざけた名前で呼んだら殺すかんな。」

「殺されそうになるとか、やはつ俺はお密さんではない？」

「いや、それは響が悪いでしょ。」

「アイシテルはどうちの味方なんだよつ……！」

「響。」

「……え。あ、うつ。えと……ありがとつ。でもそう真顔で言

われるといつちが……」

「照れてる響君は可愛えな。」

「だまれハ神。照れてなんか無いつ……」

「せやから名前で呼べと言つてゐのこ。」

なんだかんだで響の目が覚めるまでパンハンを食べるのを待っていたのである。

アイシテルはもぢりん、はやても守護騎士達も。

それを聞いた響はまたもや泣いた。

ぼろぼろと涙を流しながら。

「お、あれ、を感じさせようとしたってそういうのがないんだがらな。」

「え、あれ? なんで泣くん! ?

えええつ! ? ちょ、ちょつといつー? ええといー? ?

はやてが戸惑い、守護騎士達も戸惑つ。

そらそりである。

普通にお密さんを歓迎しただけで泣かれるのだから。
アイシテルだけがそんな響を聖母のよつた笑みを浮かべて見守つて
いた。

帰り際。

「ハ神・・・そのありがと! 」

「何言うてんねん。お密さんを招いたくらいで泣かれてもうつとし
ては良く分からんかったわ。礼を言われてもこまいち良く分からん。」

「関係ない、俺が言いたいから言つんだ。」

ちよつとオリヌシ臭い言葉を吐いたが、よくよく考えるとあまり格

好よくな。

「へこうか名前で呼べー。暁ゴハン」駆走してやつたんやからそれ
くらこええやろー。」

「はあ？

そこにこだわるねえ・・・高町さんといい、月村さんといい・・・
結局俺は呼び合つ」とまかりならんかつたがな。くそ、山田のや
つめ。」

「山田？」

「ハーレムを無自覚に形成し、次々と美少女達をその毒牙にかける
ふてえ野郎だ。八神も会つたら気をつけ——いや、俺が言つこと
でもないし、言えたものでもないな。」

「はあ？」

「んじや、もう用事は無いから会つ」ともないだろつナビ、セヨつ

なう。」

「え、もう来てくれへんのつー?..」

「ん?」

当たり前じやないか。もともと話があつて來た訳だし。・・・これ
以上優しくされても困る。どのみち別れが来るし。」

「なんて？」

「いや。とにかくそれじやね。」

「や、そうけ・・・残念やなあ、せつかくの友達が出来る思つて腕
によつをかけたつたのに。」

「う、」

響の良心が痛み出す。

が、響としては仲良くするわけには行かない。

理由はもぢろん原作組みだ。

イタイけな少女の胸を探みしだい。なんてことがはやでにも云わ
れば、少なくとも仲良くは居られまい。

むしろ軽蔑の眼差しを受けること請け合いである。

が、さすがにゴハンやアイシテルの擬人化の強力など受け、身に覚えの無い恩だとか好意を一身に受けるのもバツが悪い。せめてものお礼としてシグナムたちに協力することにした。物語がどうなるにせよ、リンカーノアを集める手伝いならば問題ないと判断して。

まずかつたら山田君が何か言つてくるだらう。

蒐集についてだけは秘密にしたいようなので、シグナムに念話を送る。

『シグナムさん。なんだかんだでこつちとしては過剰な恩返しをされてしまつた氣もしないことも無いので、リンカーノア集めくらいなら手伝う。』

『いや、せつからくの申し出はありがたいが、それでは主はやてが悲しむ。受けすぎた恩を返すといつならば、たまにほんのうして家に遊びに来てもらいたい。』

『いや、それは……』

『……何か事情があるのか？』

『別に無いと言えば無いですし……あるとこえは……あるようない？』

『管理局も出でている。お前も犯罪者の仲間入りはしたくはあるまい？』

『変装すればいいのでは？』

『気持ちだけ受け取つておぐ。』

『……さうですか。』

受けすぎた恩を返そつたけれど、いらないといつならば押し売りするほどもあるまい。

家に遊びに来るといつのは……ひょつと考えてからで。

主人公組みと知り合つまでもないいかなあとが思いつつ。響は帰宅するのであつた。

学校をサボつたことで文香に怒られたといつのは余談。

アイシテルのことで「娘が出来たみたいで嬉しいわ、アイちゃん。・でいいかしら?」「大丈夫だよ、文香ちゃん。」「ふふふ、こうしてちゃんとづけで呼び合つと昔を思い出すわ・・・」といつのもまた余談である。

一週間後ほど経つ。

「ふつ、結局来てしまつたな。」

「いらっしゃい、響君。もうこうへんかと思つてたから嬉しいで。そしてかつこつけてるところ悪いけど、ちょっと気持ち悪い。」

「なんだかんだで居心地が良かつたみたい。ごめんね、はやでちゃん。気持ち悪くて。」

「別に気にしてへんし、面白いからええねん。アイちゃんは今田はあのばりあじやけつと?とかいうのじゃないんやな?」

「あれは間に呑わせだつたし、普通に街中を歩くのは恥ずかしいってば。文香ちゃんのお古の服を仕立て直してもらつたの。」

アイシテルの服は簡素なワンピースとハイーネックスだ。ニーソックスは外せませんよね?

「ふみかちゃん?」

「響のお母さん。すつじく若くて綺麗よ?響の能力もあるけどね。」

文香は非常に若々しい。

響のおっぱいチートによるアンチエイジング、もとい不老ゆえに。母親のおっぱいを揉むのは非常に居たたまれないが、響としては断れないのだ。

常日頃から非常に愛されてるゆえに母親の望むことならば基本聞く。なのはの件でも苦労をかけてるし。

ちょつとマザコンが入っている。この世界に生まれた当初は母親もヒロイン候補だったというのに、時の流れは素晴らしい。いや、響が着実に変わっているのだろう。概ね良い方向に。

「へえ、どんなか見てみたいな。」

「今度遊びに来たら? 文香ちゃんも話したがってたし。」

「やうさせてもらひ。てか能力で?」

「おっぱいチート。」

「はっ?」

「おっぱいを揉むことによつて色々な効果をもたらせる能力よ。」

「・・・なんなん? その変な能力? ほんま?」

「私は嘘つかないもの。」

「俺は嘘をつくみたいな感じで言づの止めてくれないつー?・?」

「もまれてみる?」

「いや・・・遠慮しとく。」

「賢明ね。」

「・・・俺はつづこまんぞ。」

今日はちゃんと学校を終えてから遊びに来た。よつてすでに夕方。

「シグナムさんたちは?」

「シャマル以外はみんな出てつとる。一緒にいて言つてもダメみた

いやな。」

「その言ひ草だとまるで彼女たちのためには言った……感じに思えるね。」

「さうなの？ハ神。」

「……まあそやな。やたらと疲れた様子で帰つてくるから……ああ言えばひょいとは自分の体を大事にしてくれる思つたんけど……結局、早く帰るよくなつたとは言え、むしろ疲労の度合には濃くなつた気がして……」

それはそうだ。

はやてを心配せまいと早く帰る場合、その分リンカーノアを短い時間で集めなくてはならぬ。

多少以上の無理はしていると考えるのが普通だ。

そつしてのんびりリビングで話しているヒタバタヒシャマルが降りてきた。

「「めんなさい、はやてちやんつーちよつと急用があつてーーーあら、2人とも来てたの?出来ればお茶を入れてあげたいんだけど今は……」

「大丈夫、お構いなく。」

「……。」

「シャマル最近忙しそぎひんか?もつと自分を——」

「「めんなさい、はやてちゃん、お話なら帰つてきてから聞かせてもらひつから、それじゃ、2人もじゅつべつーーー」

そのままシャマルはホールを羽織つつも玄関を駆けて行く。

「シャマル……。」

はやての寂しそうな声が嫌に響き渡った。

仲良くなるのが辛いんだ

「よし、アイシテル。俺たちも行くぞ!」

「・・・まつたく。黙っていたと思つたら・・・いいの?」

「何が?」

八神が困つてゐるといふならば助けるのもやぶさかではない。「・・・ふふ。まあいいか。というわけではやつちやん。私達も出かけてくるね。」

「べ、別にええけど・・・何? いきなりどこ行くん?」

「ちよつとそこのままで。」

寂しそうなはやてを見てビビリな響としては頑張った。

いずれ軽蔑される未来が待つていいよ!とも、田の前の女の子の曇つた顔を晴らすため!

響は守護騎士の手助けをすることを決めたようだ。

不思議と響が格好よく見える!――

「はあ・・・見直したと思つたらこれかい。」

「はつ! 何を言ひ。これも立派に八神を助けてるじゃないか。」

さて、あそこまで意氣揚々として出かけた響が向かつた先は地球と同じような管理外世界。しかしリンクカードアを持つ動物が多い世界である。

「てつくりシグナムたちを助けに行くと思つたんだよ、私はね。」

「・・・? アイシテル、ボケた?」

そんな」としたら高町さんたちに会つてしまつかもだらう?――

「いや、やうだけど……その気まますをはやってちゃんのために我慢するだらうから格好いい……といつか見直したというか、でも見下げたと言つか……ま、響だもんね。」

「それに今度こそ山田君も容赦せずに襲つてくるかもしけん。そんな恐ろしい戦いに身を任せるとどう俺は追い詰められていいな……！」

「いや……そうだけど……はやてちゃんのために……」

「だからこれは八神のためでしょ？」

リンク一コアを集めろやあ！つていう催促の元、闇の書が八神の体を蝕んでるわけで……」

「うん……まあこれも助けになるし、いいか。」

「変なアイシテルだな。」

「逃げ腰が板についてくるの氣づいてる？」

「違うな、適材適所といつやつだ。第一、シグナムさんだつて気持ちだけで良いつて言つてたじやん？そこで無理に善意の押し売りをしても昔の二の舞になりかねん。」

「……今こそ押し売りの時でしょ！」あ、そっちこるよ。」

「おおう……予想以上に凶暴そう。ここにつけ止めてして、むづづのヤツにしよつ。」

「いや、あつちは小さいから1ページ分にもならないと思つよ？」

「アイシテル、俺はな。冒険つてのが嫌いなんだ。八神が病を患っている今。手堅く行くのが正しい選択だと思うんだけどどうよ？」

「ふぬけ。」

「ちよつ！？」

だ、だからこれは手堅く行くためであつて、決してあの幻獣が強そ
うだからとかじゃなくてだな。」

「私としては日本じゆ情けなくともいいから、ここにどう時は頑張
れる男の子の方が好みだな——」

「よし、今日は冒険したい気分だ。つーわけであいつからリンク一

コアを貰おう！」

といいつつ、ちらちらとアイシテルを見る響。分かり易いやつである。

ちよつと腰が引けるのは、愛嬌。

「……くす。」

アイシテルは軽い気持ちで冗談のつもりで言つたのだが、自分の気を引くために怖いのを無理してるとほつきり分かる姿を見て、悪い気分ではなく、また少しだけ響を好きになつたのだった。

「よーし、やるぞー。やつてやんよー。」

「ほら、とつととこくつー。」

「あがふつー。」

お尻を蹴つ飛ばして、響を敵の下へ送り込む。

「ほわああああああつー。」

やつぱりこえええええつー。」

ち、近くこないでえええええつー。」
「ブレイカーー。」
「ブレイカーー。」

もつとブレイカーー。」
「ぶれいかああああああつー。」

焦つて収束砲を連発する響。焦つてでたらめに撃つてるので一撃も当たらない。

魔法の威力だけは凄いので、それを見て幻獣は逃げていつた。

「……はあ、時間がかかりそうね。」

「……ぶれいかー、ぶれい・・・かあ？」

おおう、いつの間にか逃げてたつー。？」

ふふふ、この俺に恐れをなしたのかつー。」
「おみみりつー。」

「あがふつー。」
「アイシテルー。」

「見てたけど全然ダメ。当たつてないでしょ。ほら、次。」「ま、まだやんのか・・・正直勘弁してもらいたいんだが・・・

またむりむりとアイシテルを見て、響は嘆息。

武器を構えて再度、獲物を探しにいくのであった。

幻獣よりも山田君と相対した時のほうがよほど危険な目にあつたにも関わらず、見た目で怖い幻獣に恐れを生ずるのは響のチャームポイント・・・だつたら良かつたのかもしれない。

「ただいま・・・といつかお邪魔します。」

「響君、おつかれさん。

ちよつくりそこまでといつ割には泥まみれだつたり、くとくとになつてたりでどう見ても心配なんやけど?」

「ちよつと未開の森まで行つてただけの」と。

「日本にそんな場所あるんかいな?」

「世界の果てにあるもんや。」

「・・・はあ? そつなん? 確かにそら一つか二つくらいにはあるかもしがへんけど・・・」

「とりあえずシグナムさんでもヴィータでもいいから呼んでくれる?

「あがつていかへんの?」

「家の中に泥を散らすわけにはいかないだろ。この気遣い、誉めてくれてもいいんだぞ。」

「いや、それくらいは当たり前やろ。」

「・・・そうけ。ナデナデしてもらいたかつたのだが。」

「・・・んま、そういうなり・・・いつ?」

「ば、ばかたれつーほんとにやつがあるか? ...」

「え、そ、そ、うなんつーてこつか、せつかく撫でてやったの」どうしきそつちが切れるんや！理不尽やるー。」

「。。。

「どうしたの？アイシテル？」

「。。。別に。私には言わないのね。」

「何を？」

「つむせこ。」

「。。。はつ！まさかやきもーーーがはつー。」

「つむせこつむせこ。」

「だ、だからとこつて鳩尾はやつすぎだと思つます。」

アイシテルはちよつとだけ嫉妬した。

「騒々しいな。。。む、響か。それは。。。できることをと思つたんだけど。。。」

響はアイシテルに持つて貰つたリンカーノアをシグナムに渡した。

「。。。。」

シグナムはそのまま響のいでたちを見る。

そしてふつ、と笑つた後、口を開いた。

「すまない。いや。。。礼を言つ。あつがとう。」

「よ、良かつた。。。。ええと本当に迷惑じゃないよね？」

「迷惑なはずがあるまい？」

「。。。やつ、それなら本当に良かった。」

内心やはり迷惑なんじやないだろ？と不安になつていた分、響は心底から安心する。

普通ならばいのぐらいでそこまで不安になることも無いだろうが、響の場合はちよつと特殊であり、いまだ勘違い癖や独りよがりな部分がままある。それを自覚してゐからこそ湧き上がる自身の無さは、そうそうに消すことが出来ない。

“自分のしてることは本当に相手にとって嬉しいことなのか？”といつ決して良いとは言えない疑惑を——どんよりとした気持ちを胸に持つたまま、響は他者と触れ合つ。それはなのはの一件以来、ずーっと心の奥底にあるトラウマである。

なんだかんだでシグナムたちの方に援護へ行かなかつたのは、自分が足手まといになつたり下手に氣遣わせたりした場合を恐れているためだ。

相手も自分も複数の場合、チームワークといつのが出でくる。一対一に持ち込むように戦つたり、仲間を巻き込まないよつに戦つたり。

そうした戦闘の動きを感じ取れなかつた場合、味方どじろかむしろ味方するべき相手を自分のミスで殺しかねない。

そんな危惧があるために響はそちらへ行くのを良しとしなかつた。

ほつと息をつく響を見るアイシテルの田は悲しそうにゆがめられ、その過剰な反応に人の気持ちに敏感なはやはては疑惑を覚え、シグナムは戦闘による疲れと判断した。

「んじゃ、今日はこれで。次に来るのは……来週ぐらいい？」

「そなん? 別に毎日来てくれてもええんよ?」

「それはさすがに……情が移りすぎるといつか……」

「なんて?」

「いや、なんでも。」

あまり仲良くなると遠くない別れが寂しくなる。

今でもそのことを考へるだけで十分に寂しいのだから、これ以上仲良くなつたら月村さんの時のよひこ・・・いや、それ以上に即泣してしまうに違ひない。

だからこそ響ははやてを名前で呼ばない。
意識的に呼ぼうとはしないのだ。

響はそのまま句も言わずに帰つた。

「あ、ちよこまち、風呂に入つていけば・・・」

はやての声は聞こえないフリをした。

仲良くなるのが辛いんだ（後書き）

弟が髪の毛をブレイ系？とかなんとかいう渋谷的なセットをするように。

見ていてイタイタしいですww

弟曰く「ぱんぴーには良さが分からんんだ」とのこと。

分かりたくないな・・・中高生の下げパン並みにドン引きです。なぜわざわざ足を短く見せたがるのだろうか？

ま、ファッションは個人の個性を出す術でもありますから別に悪くはないんですけどね。

ただ、あれは万人受けしないというだけで。

心がかるべきか

響はとこりと、今日もコア集めと勤しんでいた。つこでとばかりミシードのお金も稼いでいる。

そんなある日のこと。

『お願いできないかしら?』

『はあ・・・ええと、娘さんのサポートですか?』

響はリンディに仕事として娘のサポートをお願いされている。娘とは言え、義理の娘でフェイトと言ひりしい。

どこかで聞いたような気がしないことも無い。というか、いつもやの金髪少女が思い出されたがたまたま同姓同名なのだろうと深く考えなかつた。

コア集めで疲れていて頭が働かなかつたと言つものもある。いや、この場にアイシテルがたまたま居なかつたと言つのもまた災難であつた。

アイシテルが居れば諫めていたものを。

響はそのままリンカー・コアを一応見られないよつてリンディから隠しつつも仕事を快く承諾したのである。

コレが後に面倒なことを引き起こすとも知らずに。

「どうしていつも？」

『……なぜ私を呼ばなかつた？私がいれば……響のバカな行為を止められたのに。』

リンディに呼ばれたその日。

艦に来て、響は驚愕した。

なんどなのは達一行がいたのである。ちなみにアイシテルは響の体内にコニゾンしている状態。

こいつらをサポートしなくてはいけないのか……気が滅入り、彼女たちの姿を見た瞬間に隠れる響。

山田君がいなのが幸いだが、バリアジャケットの姿を一時的に変え、顔を隠せばなんとかなるかもしれない。が、山田君も後からくるとのこと。このままではまずい。

山田君はどんな手段にせよ響を認識する術がある。
顔を隠すだけではいつぞやの「の舞であらう。
となればどうするか？

一応プロの魔導師としてここに居る以上は「昔、喧嘩別れした友人が職場に居るので、仕事をしたくありません」などと仕事を放棄できるはずも無い。というか、魔導師というよりも社会人としてダメである。

かといつてこのまま協力するにしても、問題がある。

仕事内容は「闇の書を守護する騎士人格の捕縛、もしくは消去」で

あつた。

うん、無理。

そう響は断じた。

協力しておいていきなり対立勢力にいるとか、意味不明である。しかもこいつとしてはこのままではやが死ぬことも理解してい

る。

友人であるとも認めている。

友人が死ぬと分かっているのに、なぜその真逆の行為をするのか。もちろん理由ならばある。

闇の書が完成すると一つの世界を滅ぼしかねないからであるが、それでも彼女たちはやてを諦めないだろう。納得しないだろう。1人の主君のために自身の身はもちろんのこと、世界と主君を天秤にかけて主君に傾くくらいには彼女たち守護騎士四人衆は騎士らしくある。

響としても今まで酷くされた分、はやてに依存している部分が出来ている。

本来、戦いを好まず、ビビリであり、なおかつ将来的に嫌われると分かっているのにも関わらず。

例え巻き込まれても、他の巻き込まれ型主人公とは違い、まずは逃げることを考える彼がわざわざリンクアーコアを集めているのは結局のところ、はやての笑顔が――――というと少し素敵に過ぎる言い方か。

甘えてる。

そう言った方が正しい。
もっと優しくされたい。

ただその自分の満足を第一に、「どうせ、主人公がなんとかするだろう、チートオリュシの山田君が修正してくれるだろう」という考えの下に、原作がずれることによって世界への滅亡への可能性が高まる懸念を無視して、はやてのために動いている。

結局のところ。

彼は単に自分のために。

自分にもっと優しくしてくれるよう。

そのためだけに頑張っているのである。

多かれ少なかれ人とは見返りを求めるものだ。

仮に「何もお礼はいりませんよ、自分が勝手にやったことですから」という善人らしい人間がいたとしよう。

しかしこれは「人を助けたと言つ満足感」を見返りに貰つていると考えることも出来る。

このような屁理屈を言つていてはキリが無いのだが、なにはともあれ何がいいたいかと言つとだ。

彼の行為は人間である以上　　いや、動物である以上仕方の無いことで誰も責められないことである。

そしてそれは響自身も自覚している。

ゆえに響は世界の滅亡よりもはやてを——正確には自身に優しくしてくれる人間を優先する。

これにはもともとはこの世界は物語であったと言つそういつた「現実を舐めている」感覚が抜け切つていないと言つ部分もある。すなわち、この世界に生きている人間はフィクションのようなもので、ゲームの主人公が途中で死んでも深刻に考える人間がないのと一緒で、響もあまり危機感を抱いてなかつた。

そこで響がとつた選択は。

「・・・勝負のじやくかに紛れて高町さんとフロイトヒヤウのコン

カー」「アも奪つちゃう~」

『本気で言つてるの?』

「いんや。八割くらい[冗談。」

『・・・ダメだよ? 次元犯罪者になりたくないでしょ?』

「わかつてゐるつてば。」

リンクマークアを集めて分かつたことだが、これはひどく集まりにくい。

経験値稼ぎがやりづらいゲームなんて田じゅなんじほどい。小ぶりの幻獣から奪うリンクマークアでは一行埋まるのがせいぜい。モンハンで言う所のG級クラスの大型で良くて3ページ。悪いと1ページに満たないこともあった。さらにこれは“通常”的な。

やはり何の罪の無い幻獣達に影響を与えるのは気が引ける響としてはリンクマークアの一部を切除し、回収することにしていたため、それに拍車をかける。

無理に全てを取れば前にアイシテルが言つたような副作用が出るのは分かりきつている。

むしろなのはがやられたよう、やられてなお魔法がすぐに回復、そしてまるで無かったことのように振舞えるのはひとえに闇の書のリンクマークアの摘出技能が卓越しているからである」と。しかし、そんなものを持たない響としてはより魔力を集めづらくなっていた。

ついつい、なのはやフェイトのリンクマークアを集めようと、ひょいと本気で魔が刺しかけたのは誰も責められないというものだらう。何はともあれ、響を悩ませるタネはそれだけではない。はつきり言おう。

じこの艦の戦力は過剰である。

管理局のモブが一生かかっても差を詰められそうに無い才能持ちが響を始めとして、なのは、フェイト、クロノ、山田君、そして・・・

「なんだろう?

あの巨乳の人?』

『「つづりん?』

どこか似てるよね。フェイトちゃんに。』

フレシアテスタロッサ。

フェイトの母である。

いや、今はアリシアテスタロッサの母か。

フェイトはちらちらとそちらを伺いつつも、ため息を吐く。

以前、軽く触れたとおりフレシアは自分の所業に反省はしたもの、フェイトを娘としては見てない。

人形としては見てないものの、娘としては見れないのである。

しかし、フェイトの幼少の頃の記憶は全てアリシアのであったもの。フェイトからすると唯一の無二であるが、あくまでもフェイトはクローン体で記憶を受け継いだだけに過ぎない。

昨日パンを食べた。

その記憶が人格に影響を与えないように、人格に影響を与えるのは周りの環境が第一である。

アリシアの記憶こそ受け継ぎ、口調や嗜好は一緒であるもののやはり細かい部分で差異が出てくる。

フレシアは自身がフェイトを作り出したとして、その罪から逃げようとはしていないものの、別人を娘と言つてはフェイトにとつてもアリシアにとつても自分の母性に対しても大変失礼なことだ。

ゆえにフェイトを我が子ではなく、1人の人間としてみていく。

だが、そんな関係に満足いかないのがフェイトのようであった。

さてさて、なぜこの話をしたかというとこれまた問題なのである。彼女。

今までやつてきた罪を軽くするためにアースラ艦に奉仕に来ていた。司法取引といつてもいいかもしない。

「罪を軽くする代わりに反省した証として管理局の手伝いしてよね！」

砕けて分かり易く言つならばそつこつ」と。

もちろん誰しもがこいつた取引を出来るわけではなく、例外であり能力がある人間に限られる。

大魔導師であつた彼女はもちろんのこと例外である。

山田君の忍術で生き返つたアリシアと一緒に過ごすためにもプレシアはやる気満々。むしろ今回の守護騎士を全て自分で捉えてやるという意気込みなのだ。

いまだ彼女が前戦に出てないのはなんとか山田君が押さえ込んでいるため。

ここに山田君がいないのも裏からなんとかかんとかやつている。というわけである。

一番無難なエンドへ向けて山田君は原作をあまり改変したくない。いや、仮に。

こひだはやてを捉えたとすればはやては死ぬしかない。

一つの次元世界と少女の命。

どちらを重視するかは火を見るよりも明らか。

それには管理局と言う仮にも一般人の安全を守る仕事をしている彼らに博打と言う概念は存在しない。

いちかばちかなどというのは本来、一番避けられてしかるべき手法なのだ。

すなわちはやてが管理局に見つかるとそれでもうはやての人生はバツドエンド。

かといつて山田君が下手に介入して何か一つでも歯車が狂えば一番
避けるべき最悪なカルマエンドとなる。

はつきり言おう。

そこに響まで混じると、まずもって守護騎士達に勝ちは無い。

いや、彼女たちに味方する勢力もある。

それは以前の闇の書事件を担当し、なおかつ今回使い魔にはやての
周りを探らせてくる管理局グラハム提督だ。

が。

彼は一度闇の書を解放した後、そのまま宿主であるはやてを永久的
な封印処理に処するつもりである。

これまたはやてことつてばバッドエンドである。

響はどうするべきか迷つたまま、戦場へと身を投じた。

必要なべきか（後書き）

なのはのPSPの新作が出ましたよね。買つべきか否か。格ゲーはすぐ飽きますよね。戦える人間が周りにいないと。ついでに作った会社がバン。開発陣によつて変わるとは思いますが、期待値がまま低いです。

どうせわざとゲーム内に入れなかつたとしか思えないタイミングのダウロードコスで一儲け考へていいのだろう？と。

悪くは無いのですし、ゲーム会社という娯楽を司る企業と言えど商売は商売。売れなければ潰れるのですから売ることを第一に考えるのは当たり前なのです。しかし消費者としては到底納得できることじやないんですね。ゴットトイーラ開発陣を見習つて欲しいものです。消費者としてはそつちの方が遙かに好感度が高いのに。ま、直接お金に繋がることはないですけれど。世知辛いですねえ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1936z/>

とあるチートを持って！

2011年12月29日22時00分発行